



二十四輩順拜圖會
 越後
 四

八坂4
 1810
 10-4



二十四輩順拜圖會卷之四

目錄

○城後之部

念佛堂

浄若寺

押上村

龜智法印

油井

北山浄光寺

新深乃宿

二條の海

三度粟

布乃名号

浄福寺

川城名号の中素

虎尾乃古法

城後編の向屋

三條御坊

蓮竹之菰

金波山浄光寺

太子堂

燒栗の林

八房梅

扇屋舊跡

功德地乃溪

河内谷寺

糸巻乃社

繫樞

西方寺

真浄寺

託明寺

孝順寺

五乃信寺

正覺寺
照光寺

願教寺

荒井御堂

以上



十四輩順祥圖會卷之四
念佛堂

高田より神像の
頭部は曲村あり

奉為如來春日の地此所は高祖聖人乃真像在まは元祿二年十月
二日國府五智の如來堂回縁の時高田乃來迎寺とある淨
土宗の寺は念心とう々なる道心者なり被出火を免る五智
堂の方へ走り移るふ十歳むりたる侍本像を抱へ持ち
來ていふ中いふに本像は親鸞聖人の御真像也海は是と
致るるを致いふにぞと念心は信は彼侍の忽ち方
に念心押し移さぬと來迎寺へ入奉り信心を奉りける
其後享保年中け不又一堂を營むは信は安んじり或時
本像座を復た若曰く我身神體一休信して得るは信と信は
是て是のちいと信若くは信して信は信と信は信と信は信

海ぶつ
念佛堂
御本
像



中二物の書とてうきふおひの夜より彫て是とこれ中虚は
て漆喰の小箱の是と用きしは聖人の御美筆なりて本像彫刻の因縁身
号月日教皇の名御流御和を書入るは激又不思議の御筆なるて在る

ま田よりま日新田(二里半はけふふ右のま佛堂ありま日新田より掃屋へ
又里はるは院掃屋村白香山切徳地流念寺より西佛坊用基の寺あり切
徳地乃流とてよまは造なり

五山寺川は川ぞゆる川流り名号の舊地なり若し掃屋して歩修り
てつりしが今の掃屋なりしは掃屋行町とて石ふはとて和てたは流なり

井上津後寺 西流掃屋

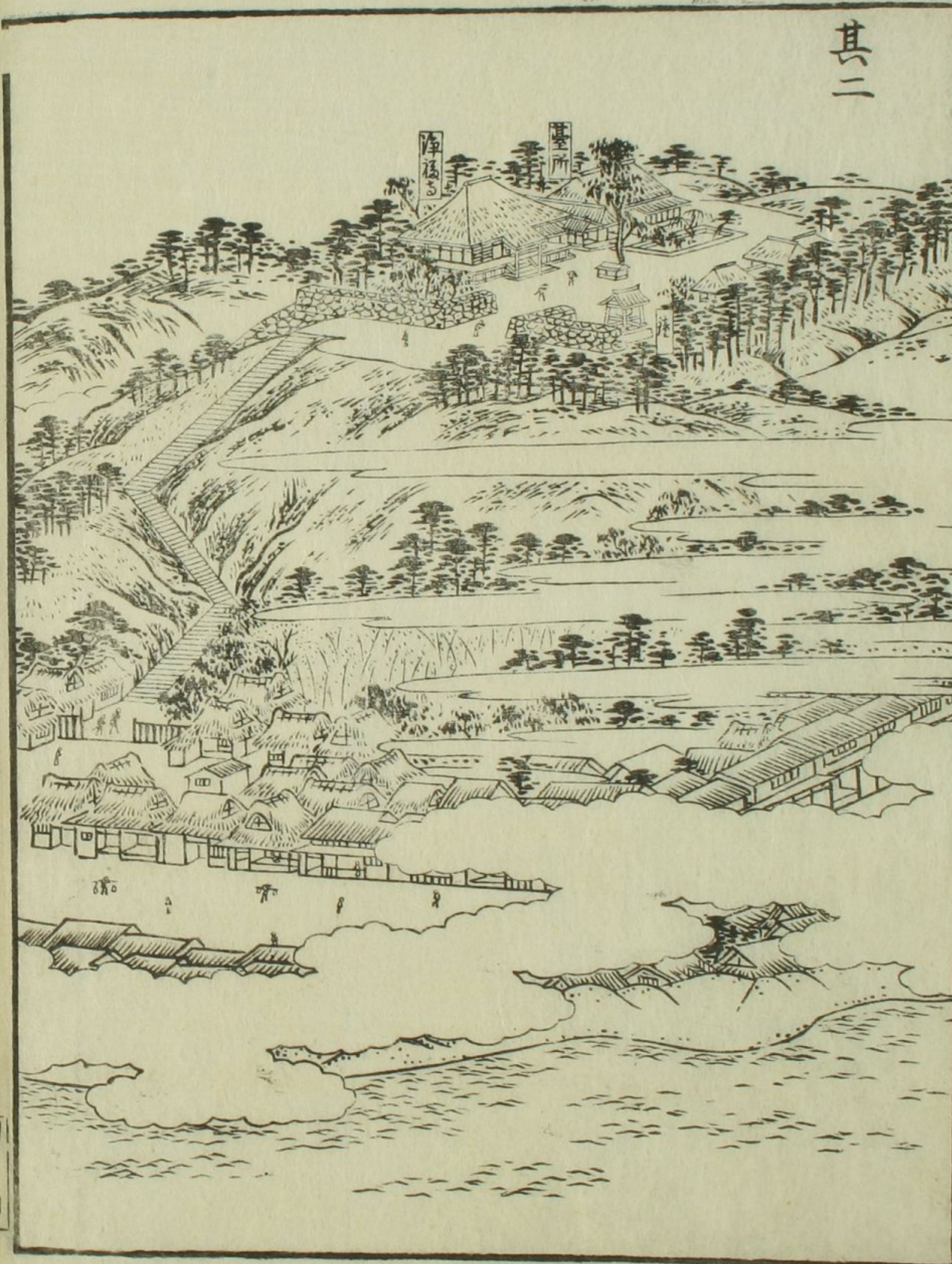
本堂九間二面三層谷山と号し 高祖聖人の御弟子若狭坊
開建の石之聖人真筆九字の名号と傳来せり此名号の傳来を
委しく見ゆふ高祖聖人出國は御化存まじりて下城後よりより
終ふなり日と書及びけ掃屋の廟屋とて人の家かよまより

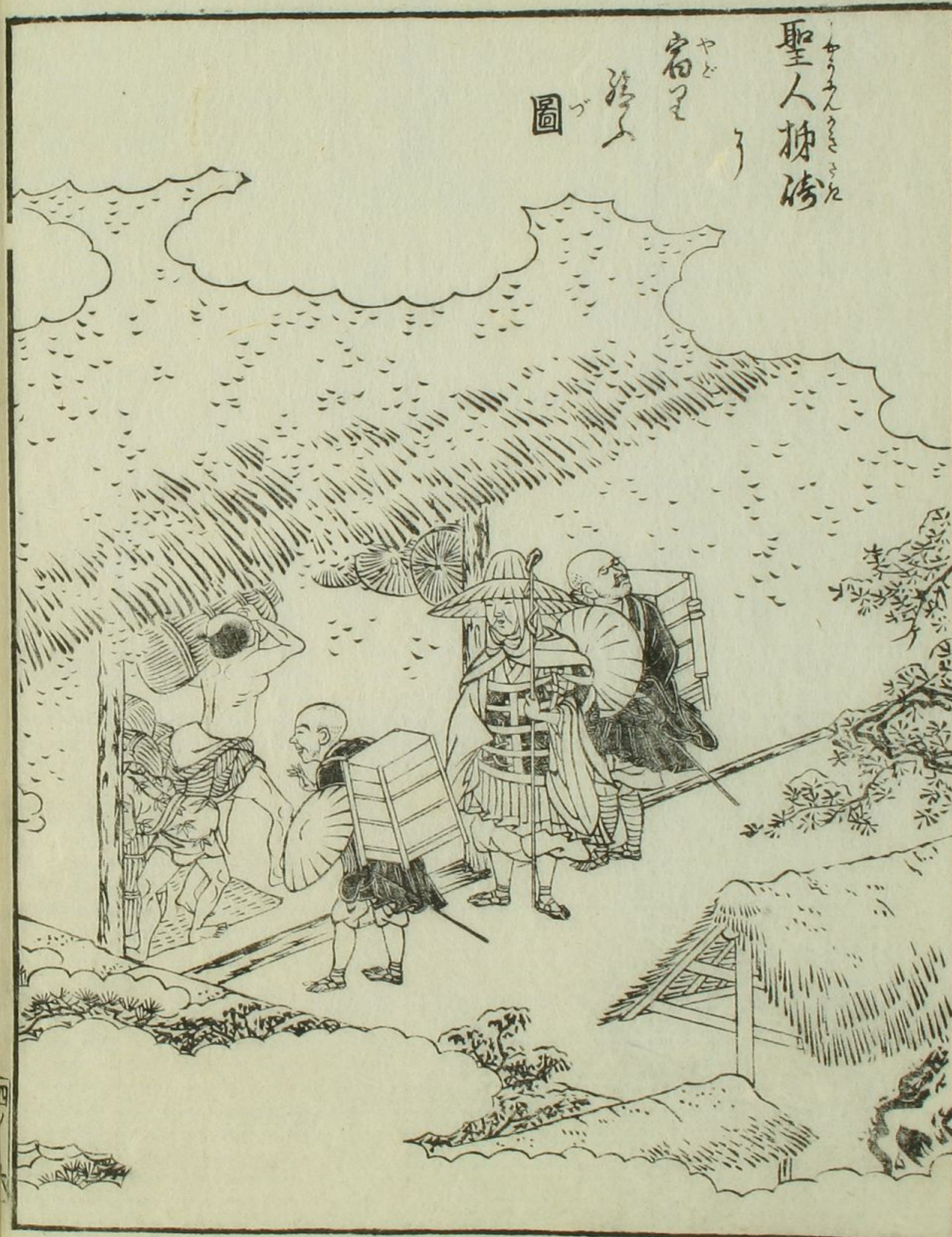
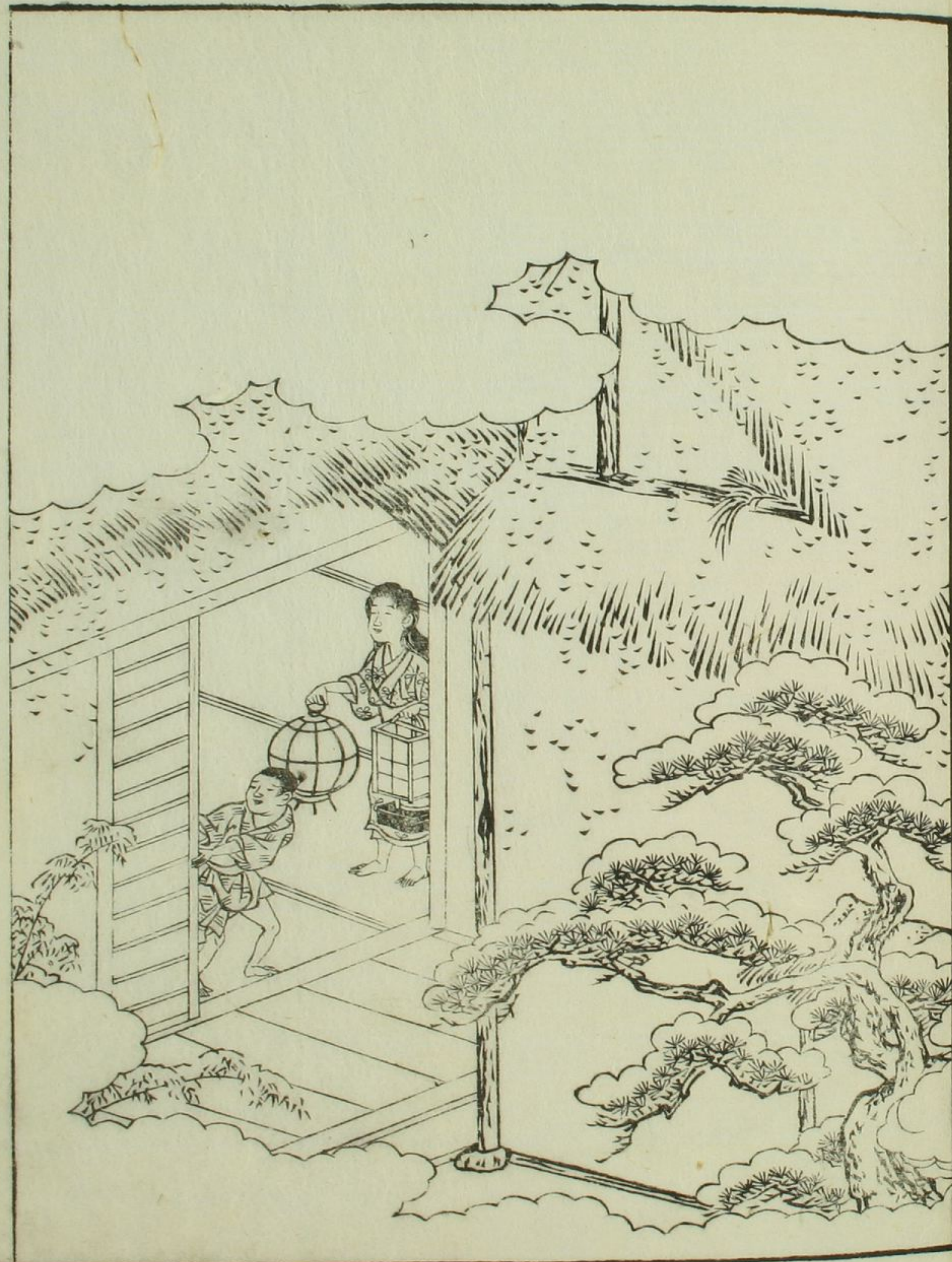
一夜の宿りとてうきふおひの夜より彫て是とこれ中虚は
見りものれは夢にうきふおひの夜より彫て是とこれ中虚は
ら此聖人きて宮ふ我の世とのごとく修り若しは食物夜具と
結りるよ及び此唯庭の隅の下のそと一夜と明とせ給りし
といし殊勝よとれませ給りる言て中とやう形の下に宿るとな
らば一夜のゆりして得るはと古き席を借るとぬ所痛いや
聖人の御頭をさげさせ給ひ一夜の宿りを免し給りるよと
ま生り塚ありと墓と抱へ形の湯よ出給ひしは時と霜月下
白乃流りしがを流御身をつんぎくごう御膚の水よいと
元よりと慈悲深きの聖人なりけりしは苦も厭ひ給り唯南
無阿弥陀佛くと稱名の御夢流流りしは殊勝よとて給り夜
いづく更けやと放く人語の答はし時とてや實の對とて





其二





聖人柳橋
ヤト
宿
図



徳安く借仰のその面より道法乃派よむせび所又信心
受得して其を恭敬より舞足の踏不致知くざりたる聖人等
と深き世法に九字の名号と書よし孫ひ又賦と款一首と口号と
孫人

柿崎と志ぶく名はくつるふまの心熱柿わたりあは
とたばされどもは扇子屋のまゝたりん

かけ通る法師と名をうりさうふかきくまたりや九字の名号

と御返款やとらけの聖人感と笑いせ孫ひ其款をり書そへ
孫ひぬ其後たるりの奉と磨て子孫絶絶よ及び御名号御款二
首よと尚書一寄附して今よ傳来ん

柿崎扇子屋舊跡

柿崎の町中よりあり昔は扇子屋が屋敷法より横にみるは十七八
の空地は日長がふ御返款の支地なりと云

若く云扇子屋御化奪乃耐妻女よと一孫人川城の名号とて今よ

尚國を回笠原山本誓寺に傳来し終ふ也此名号の中未と尋は
聖人麻子屋を名二日御遍留はしし聖朝御出立りし世終ひるが
彼麻子屋が妻女心よふ中りまの雅き御名号と頂きたりし
我の名号を受むしし御の誠念といひて法より區付奉りし御
見の名号を教へんとし其御法を慕ふく好くししは御
聖人の本山寺川と今川と號て向ふの衆人より終をせ終也
妻女を看てけ方の川端より妻をとりて中りしと申すは
聖人あはるとけ川を號せ終ひしりや老幼不変の世の御
再度御教化を蒙りんとせりし我も御化志の名号と
治りし其方へありて裁きたりしと云ふ聖人曰て曰く
け川あ甚だし女乃終を治るべしと終をせ終ひしり
し名号書て得たりしと女聖人の仰と心得難く終ひ

るが御中より紙を出一け方の川邊よまなりし紙と押ひりきて
終多し聖人の彼方の川端より御名を立終ひ川向ひの女乃
ひえりし紙を目當りしと書終ひが不思議や雲霧の
おとく川向ひの紙よまなりしと云ふ名号うりし世終
ひ終ひの御ひは妻女の仰天授地て大きに驚き終ひの御
むむびつ伏拜しし我家に歸りて終ひる御終ひる名号を
名付て川端の名号と終ひし終ひたりし終ひる御終ひる
終終代を應て終ひるが終終及び終終終終終終終終終終
人ありたり終ひるが終ひる名号を失ひ終ひる計はし
る回剛笠原本誓寺一奉納し終ひる終ひる終ひる終ひる
妻女川を號て終ひる終ひる終ひる終ひる終ひる終ひる
終ひる終ひる終ひる終ひる終ひる終ひる終ひる終ひる

稱氏とつりけは世々くくの後人乃能はうらん此聖人の唯
鏡のんまは對して其身を信じて教化して後人のまうて教
奇懐のりとはし給ひざる慈悲の聖者也此る小川と誠へ尊力の
後らせ給ふとは是奇懐のりんと此の是と厭ひく妙正法の他と
如くといふより予は法と考へる余り行是地の心より却て
聖人の化身と確く佛力の不思議を信ぜざるの語はゆる其
灰うんとするれが高祖神一の同神化養とある者海と誠へ聖
人の値過くは成りて圓法一の深き川と流り来て神尊の
名号と教ふるなどの教は其教はげていふるより比今け名
号の川を誠へ寫りせ給ふ其名号のれが各別は高祖の神
化身とあるは佛力の不思議を信じざるは高祖の奇懐のり
を如く給ひて唯神教の並道と教化して正法は此生と尊き

其の信心と得るせしめ給ふ聖なり他の聖者とは各別なる神
事やまでもちく勿論の神より之れと人とも神は徳と徳と
ては奇懐はゆるりもまはり不謂三度業の焼くる業に芽と
けじ八房の梅の極極と極給ふなり道の枝竹より根牙と生と
る歎い是皆其妙又此生の疑いと信ぜさせませよ宗法を弘め給ふ
神教化の方便は又相州美樂寺よ安西のる名号石の高祖のゆい
さだの神法はあはびや名号のり今目前に諸人乃拜するをそ
是と遊之といふやまうのりは此麻徳の神の現は高祖の神牙
子とあり給ひ給は給現の聖人を拓して圓法の益と教ひを
箱根の社廟は抄ひくは権現明くは神よ命じて聖人を尊む恭
敬し給ふ乃幸波是れ神明権現神院の中教を信じて及び
聖人の高德を尊む給ふの謂也諸人の疑念の心より人きよや

功德地
乃溪
聖人
御詠歌
の圖



故に川城の名号といふは又かゝる述ふの備後と懐ふに似て懐
 幸に流石に聖人の徳益宗法の名を偶々吳朝には考ふが
 校生して鄧林とあり奉朝は都藤が校生して芳野山の橋と
 なる例に弘法大師の虚室と文を流し流水と字と書成と
 高雄山の額の川を隔て字を流し流るる字の幸法と流
 今吾高祖枯槁乃竹本を校隔川と室号と流し流るると其の
 不日トリと其流とる不流しと流るる一具の定力幸物と感
 てる所且等術の妙と流るる不流しと流るる一具の定力幸物と感
 はして應化の聖者利益衆生乃たれと其徳と流し流るるの妙
 是之不偶七地以上の菩薩の如斯乃妙術と流し流るるの妙
 弥陀如来應化の聖人よ於てをや毫毛も疑ふべきやと流石
 ○川城の名号のる回本折云寺は竹本と流るるとは不流興寺とお流る

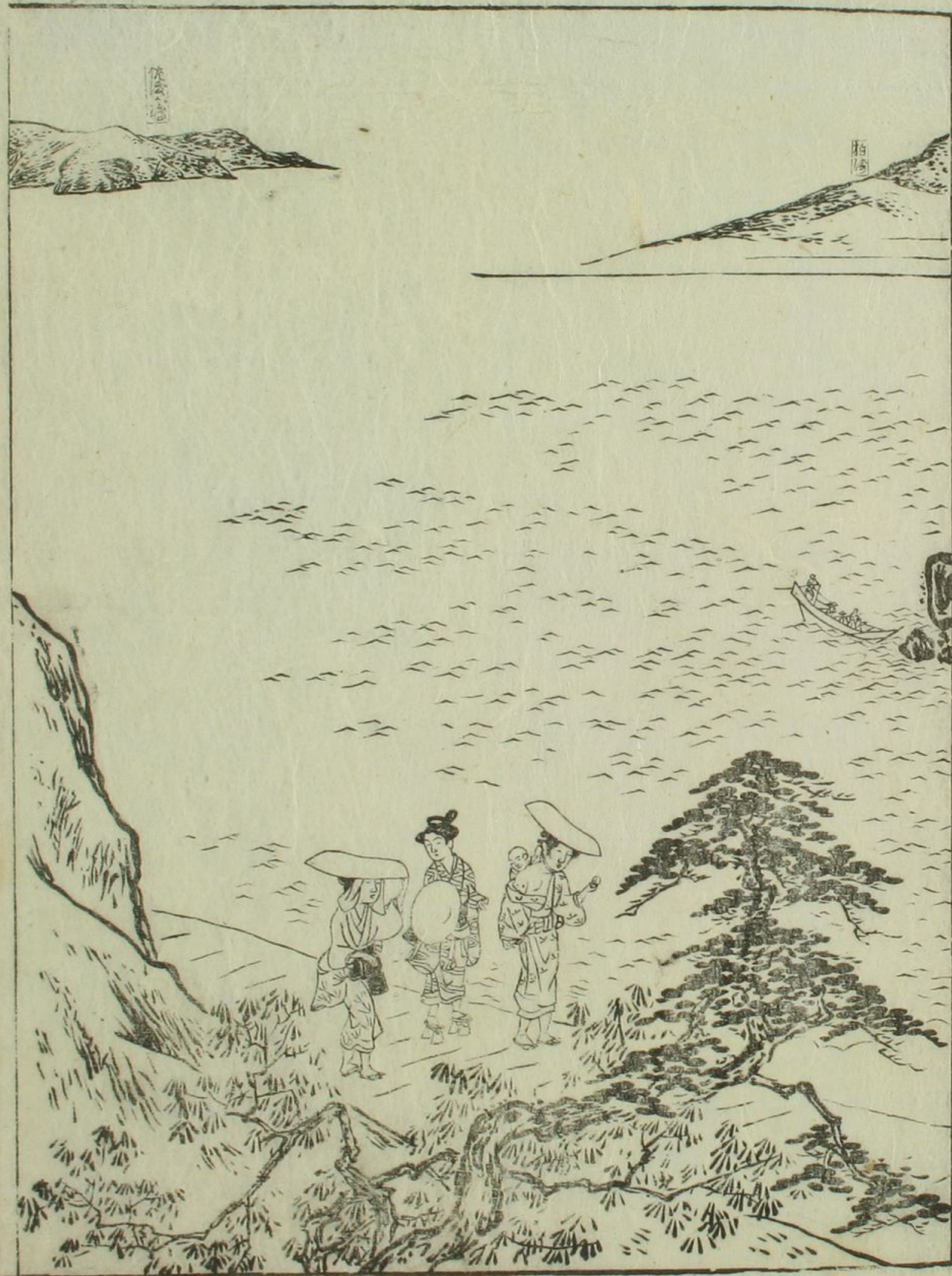
神上村



むろし海の中
石塔一ツを
得たり石押上
村のあり其傍に
小石多くあり

人此石をえて
其の石は
其の石は
其の石は
其の石は

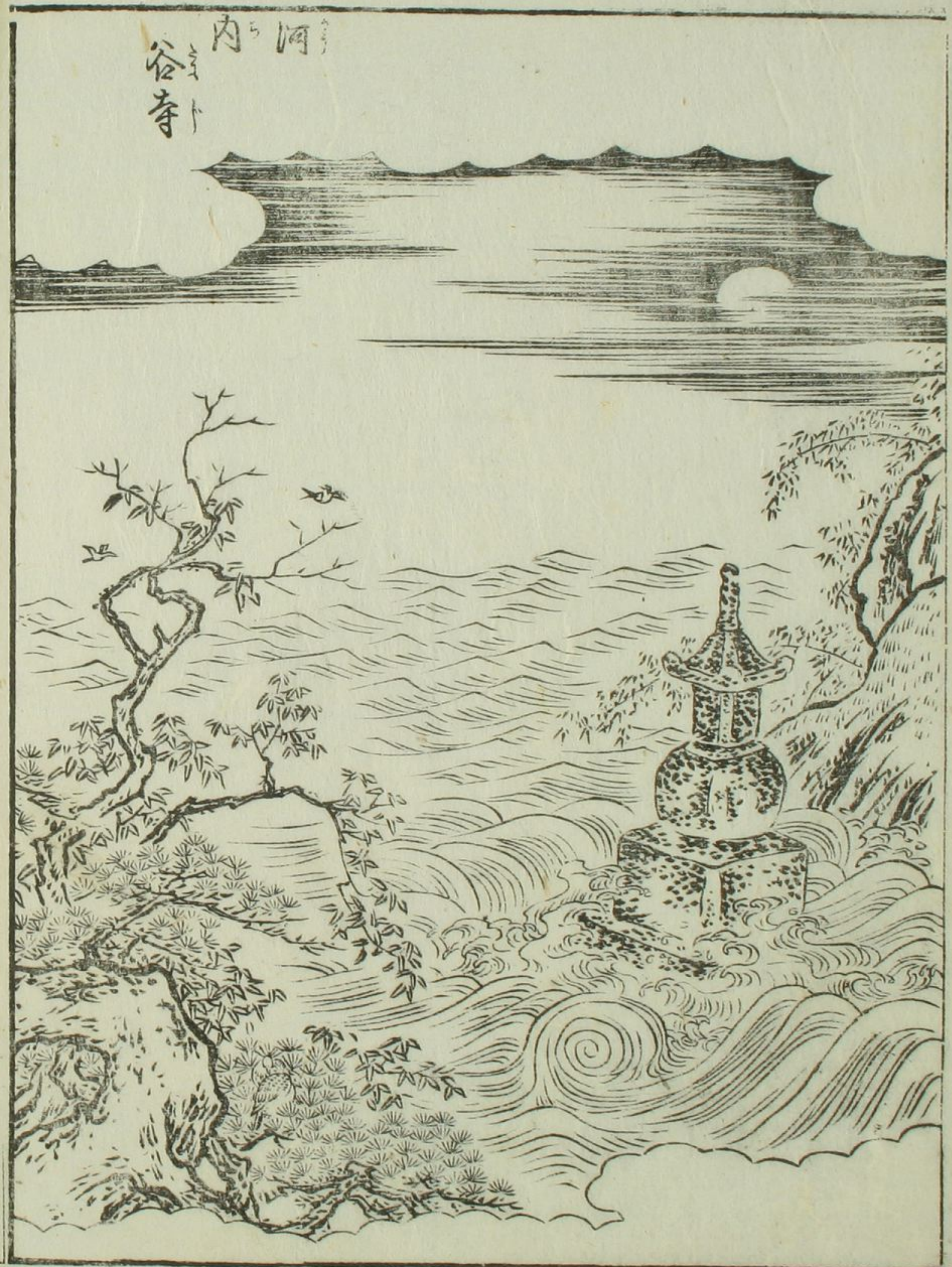




亀ヶ岡

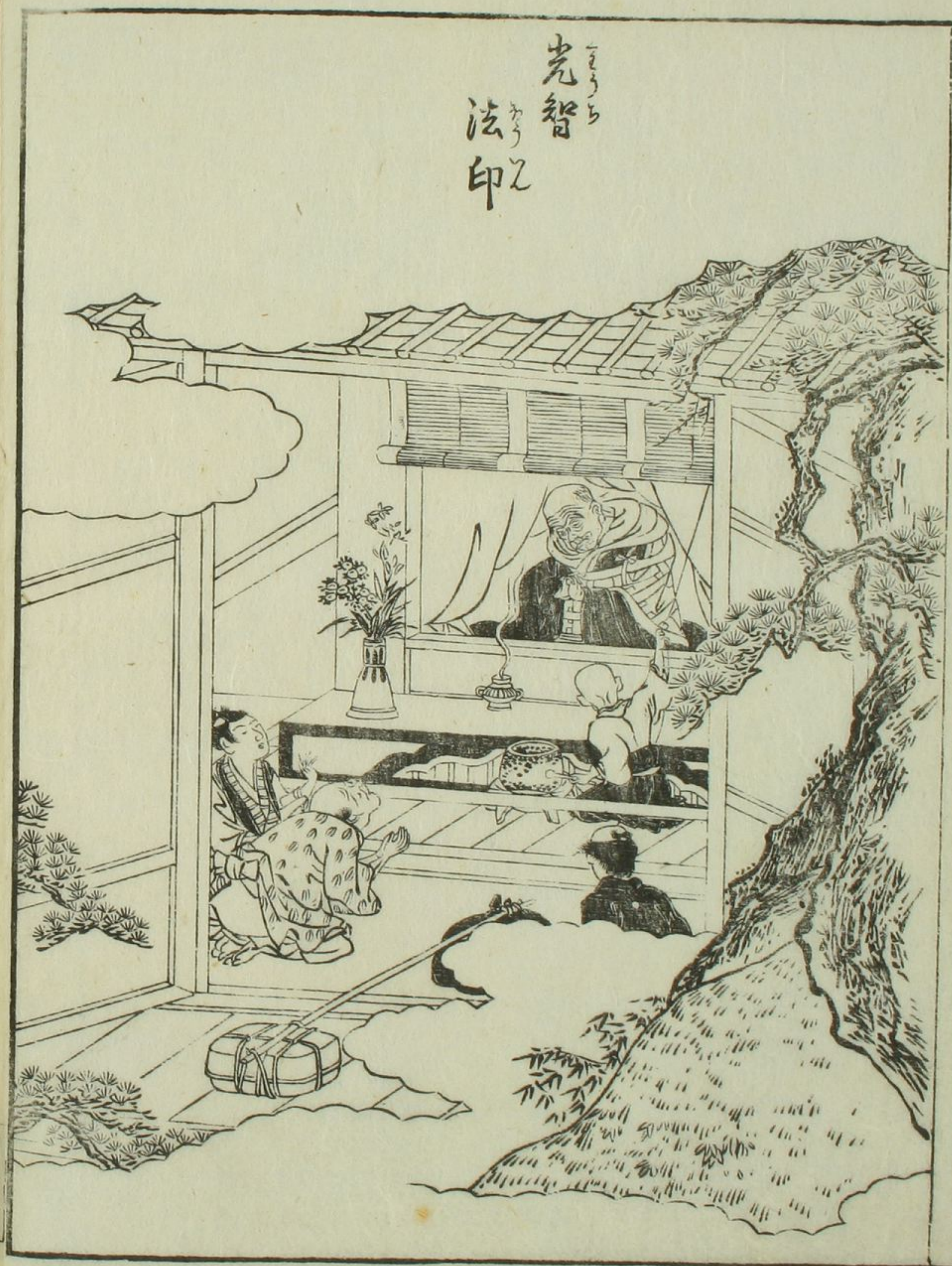








光智
法印



に里けるよと海辺にて沈後海洋中より入り寺泊より右の方山中
よ入り丁斗斗と弘智法印の寺なり

○弘智法印の寺は西津寺より入る言ふ乃寺と神は其の権柄なり
寺の右の方又巖洞に法印其内入岩上又隆座して寂然と坐し入
修其其(次女)と破と懐とん恰も本像のどくしては百余歳の雲相と
極まると今尚然とまると

○西の海邊の石階と夕の猿馬場の跡あり雲と云く一里孫彦の石に
孫彦の神社に右記と

三系御坊

寺泊より三系
孫彦の石三系の町より

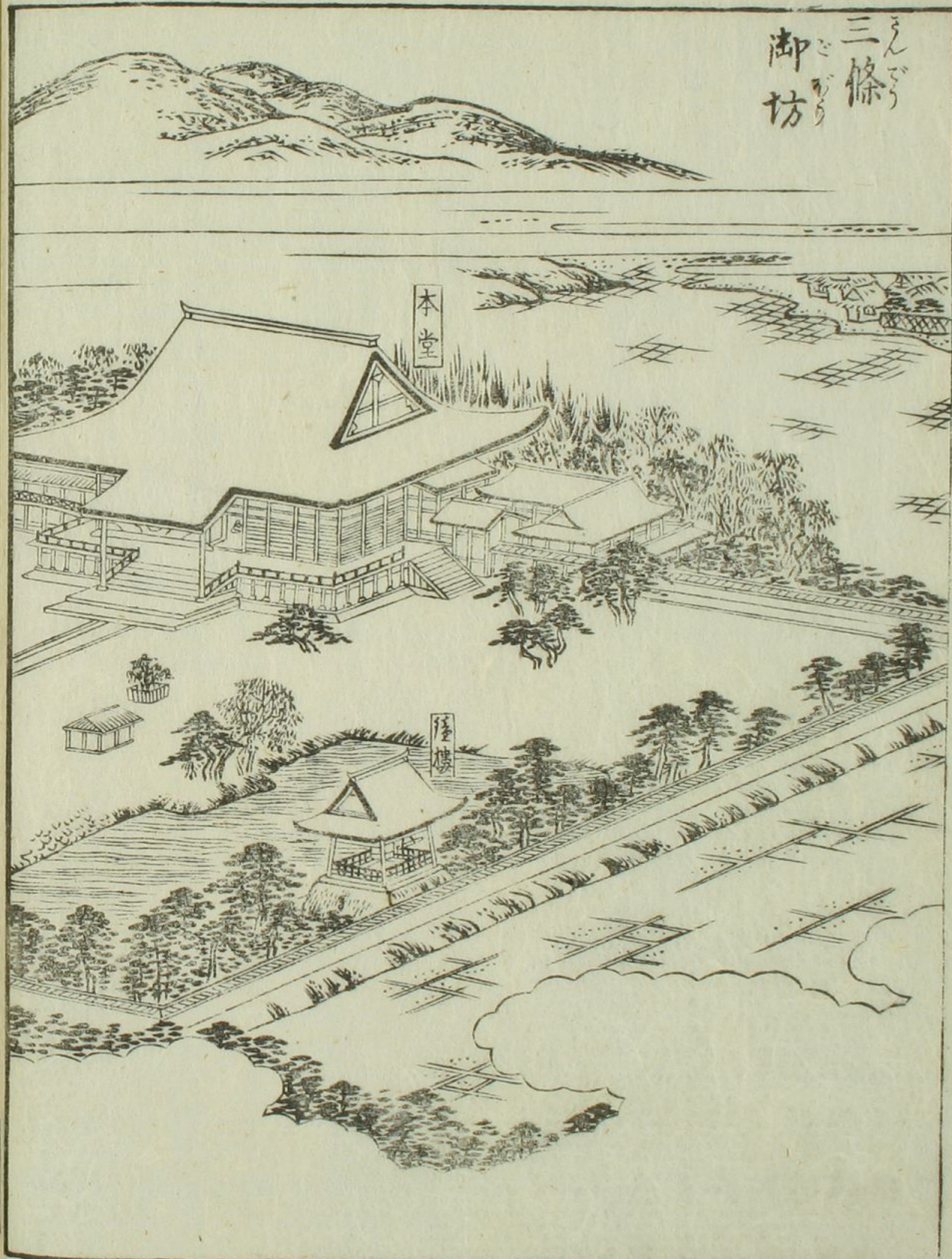
○三系より寺里斗は如法寺村百姓を其のよりのありけ家のをり
火燧出地火の代りとなせり其家に於てより小石臼と存はけり其
又節とぬきより竹と突し附はれ火とて見して彼竹の小には又
地中より火孔と引あけ忽ちまき火の竹の火燧出致日煙とて
消るより又物を焼るは其竹よそののてた火の煙より枝竹を
こしらへ中の節と考て火と吹へば遠き石まで火孔通へ火の
つり来りより速くは圓からめき村丈七と入る百姓の家より圍牆裏の前より
火のゆるめは法寺より入りて一里と不思議のゆきを懐かるとは漢土圍の圓より

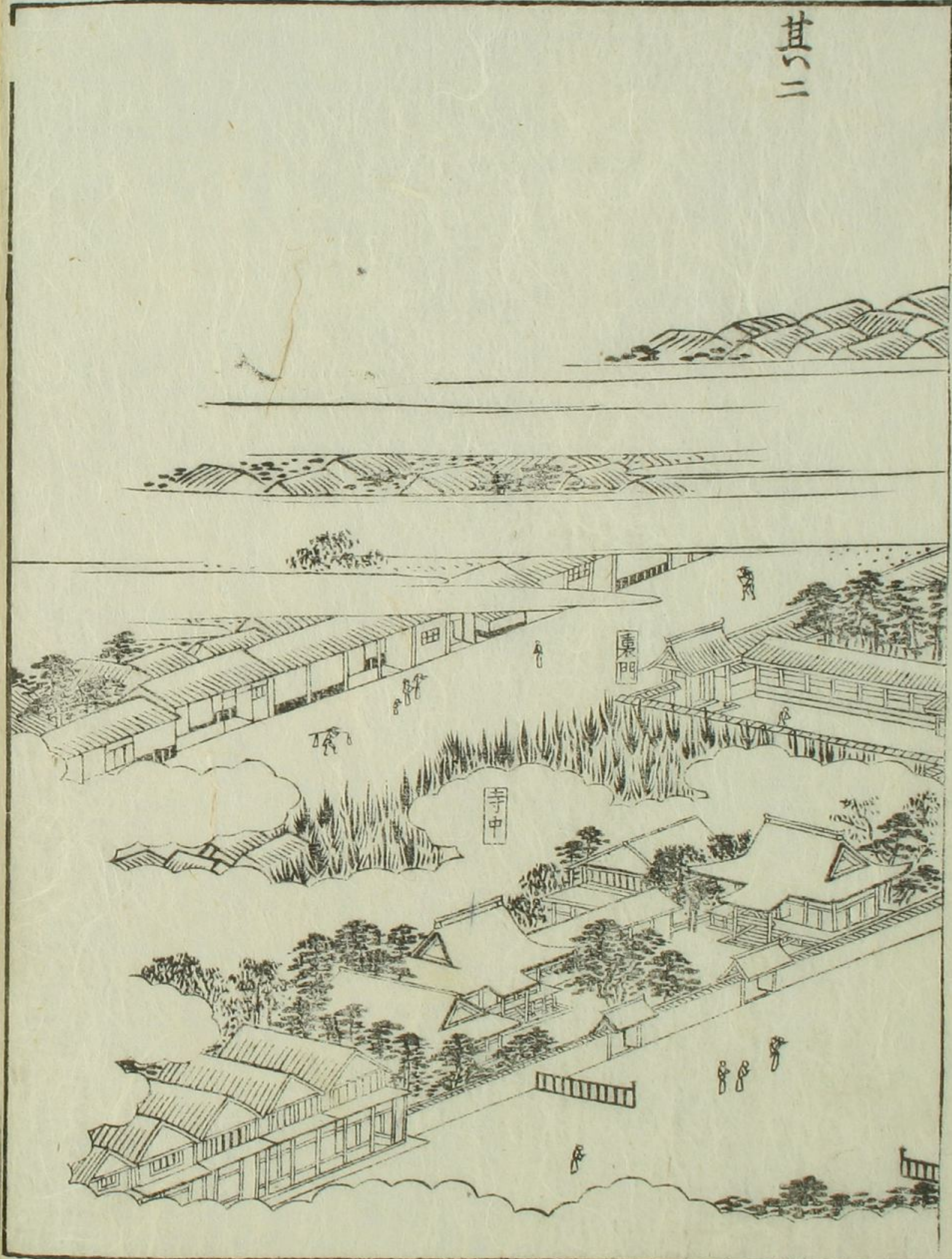
火のゆるめは法寺より入りて一里と不思議のゆきを懐かるとは漢土圍の圓より

○三系乃町より又里田とよの里又西津寺と入る寺ありけをよ祖
聖人の極修の極極の本と入るあり聖人系よりやの突をつまき
其まよと埋と修ひより今も其突の修まよとつらとつらと形よ
出まよと修ひとして是れ舊跡の二つあり

○田より十に丁湯川村より小坂を越へて石の傍よあめの池二つあり
け池あり湯の煮るより又池の淵より里人ゆきまよと入る草を
暖して桶の中へより入る釜を煮て煮通して制法して焼ゆとせり
号て釜水のゆきより是れ又唐土と石臼と名つけ山間溪の流
ぬけ舟中より出るより諸書よと入り其外漢土と石炭石塔并池
池地よと入りよる石炭燧て炭又代石炭燧と名つけ舟より池
あよと焚燧と制とる天燈のゆきして其理と押して入るよけ
後の圓よも彼石炭あるのよとけはと掘泥と目よ乾してとく
是と焼とん炭藪より舟より一池よ民家女奴の室あり

○孫彦の石内都てけ辺はカミイタチとよりのありて獲せの人は腸付
り甚まよしつとよかきり病つて魚まよ熱さしゆき腹よ切り只眼
よと入るよりの方して衣敷まよ傷つてよとよと磨と意焼はして



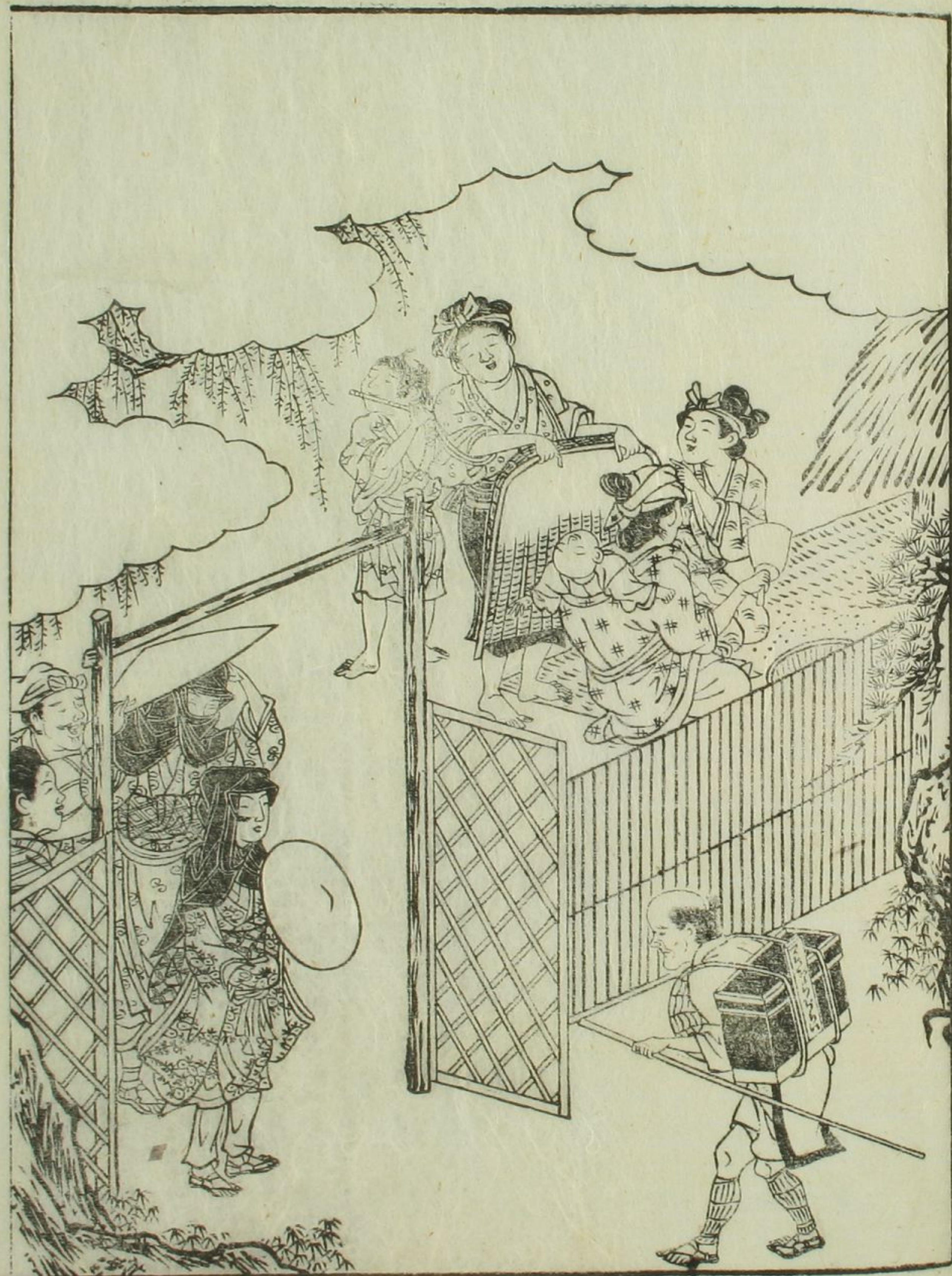


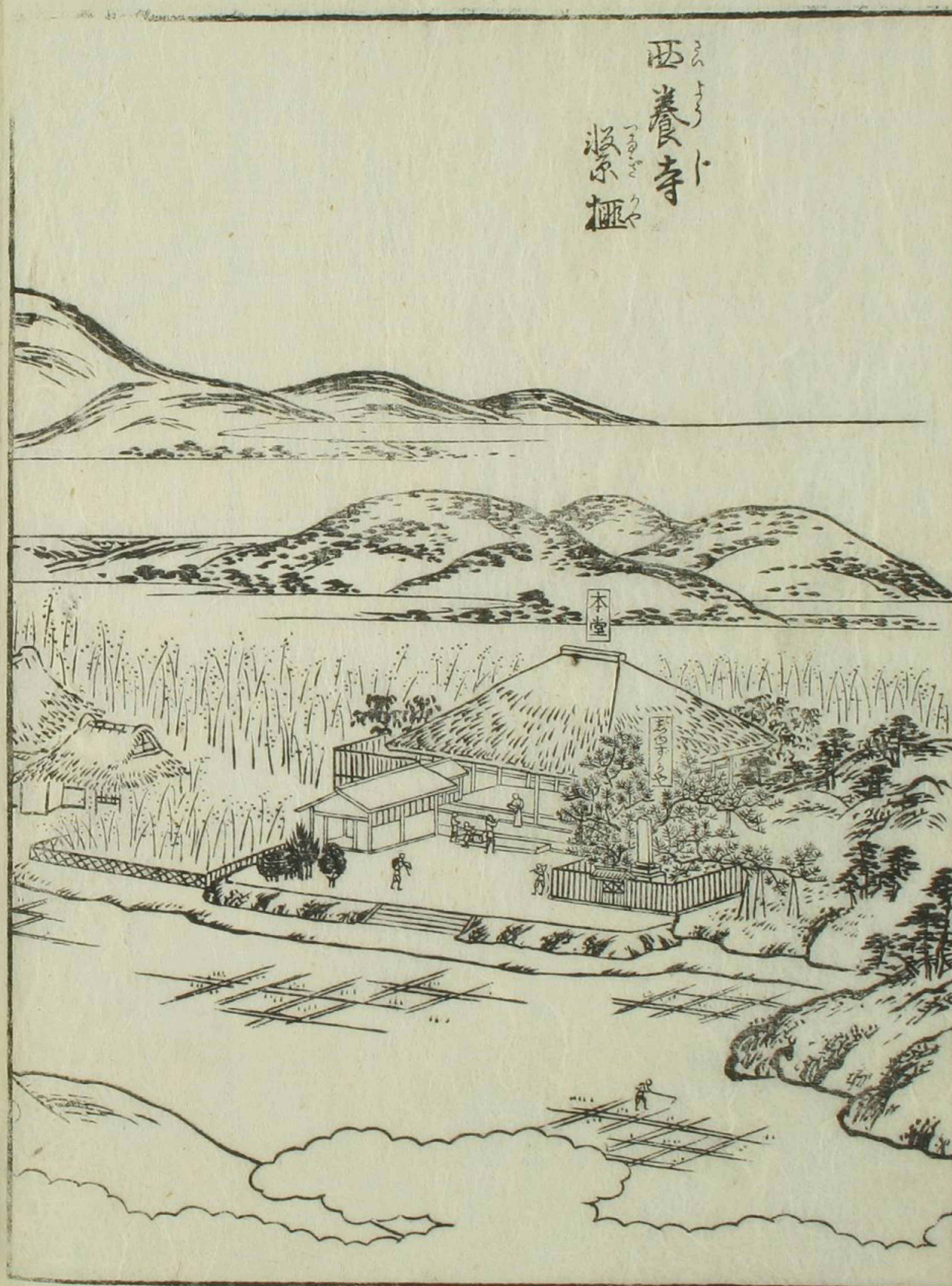
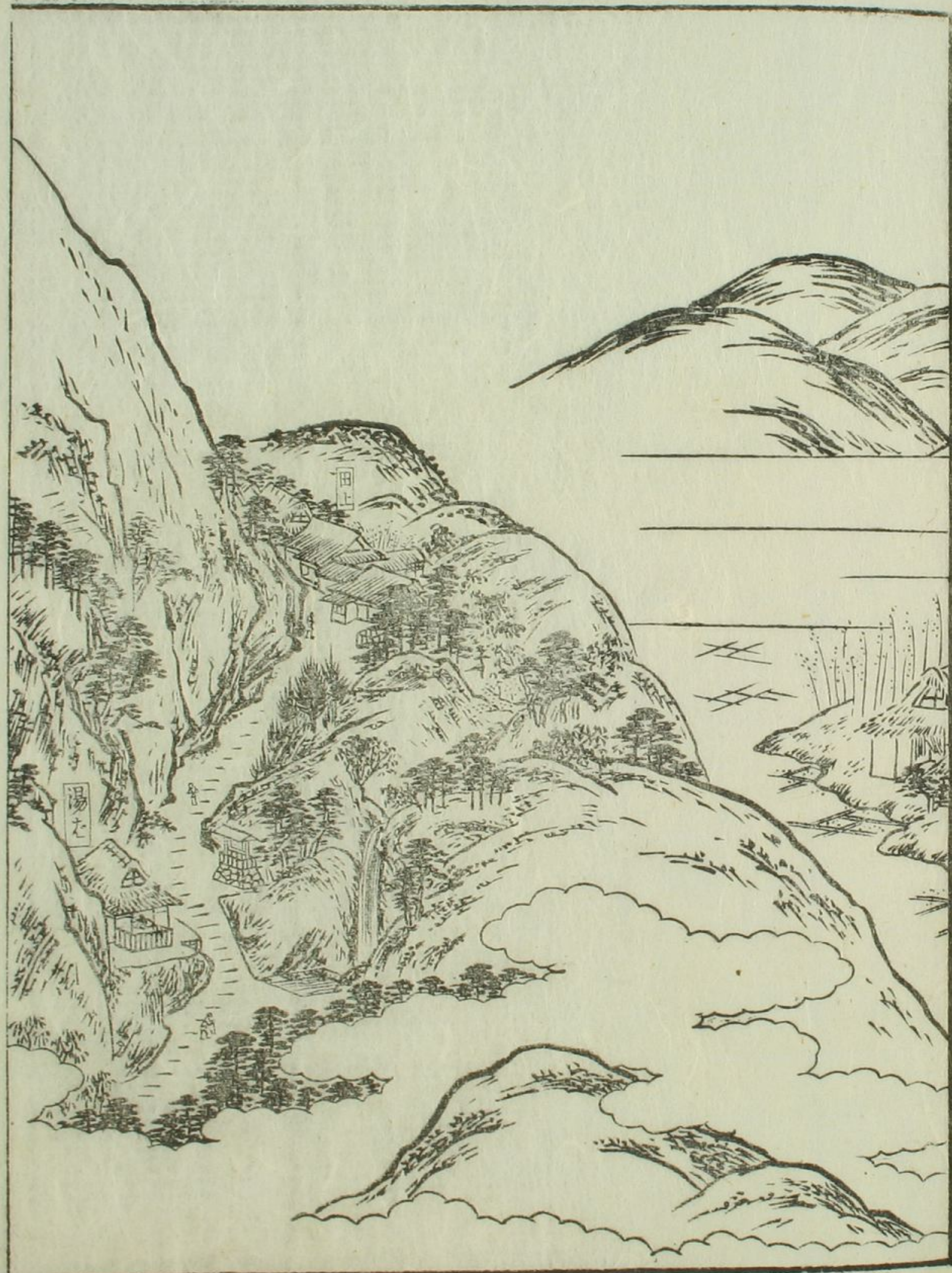
吾下せば後世に遺る一城も無ぬとけ里人のつくり或人孫彦明神乃社人よ
 けりをわびし又社人のかくけ造り僻地より天狗の群集し
 合戦をわびし作り人間の目にはとどろふより天狗の構へ掃きさち刀
 予さく疵つたかき人きかといふるが城よと形して極難といふのさ
 んと信ぐぬまうや吾やけは信し難し又け造りのと田のさ
 物の所といふるもとぞは石あり一石石の矢の根といふる
 應徳といふるのありく櫻のどらるる矢の國本朝といふ偏僻の國
 生るるのあり

逆竹之藪

孫彦の底より八里 同國浦原郡合津の底を居てあり

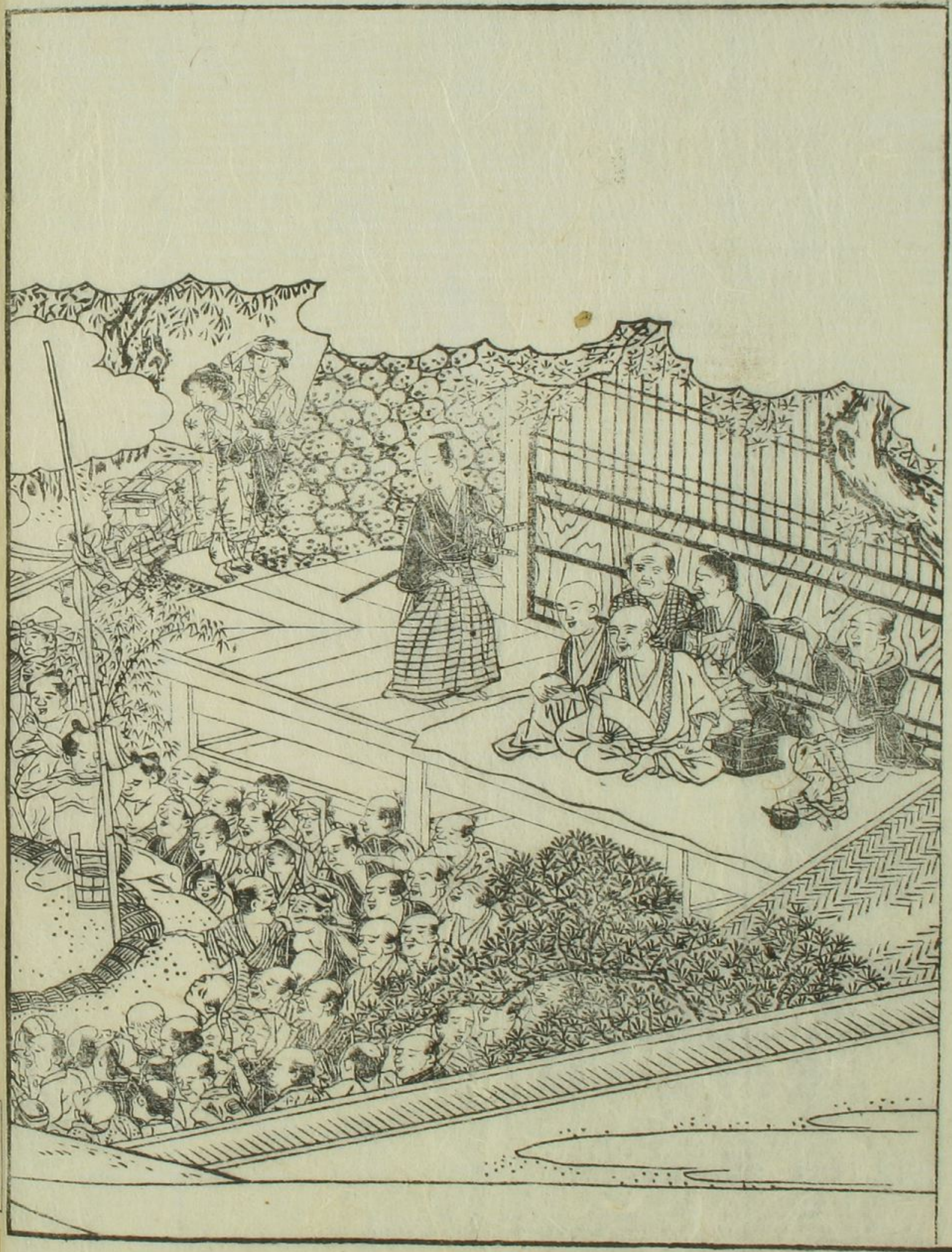
逆竹の舊依り兼元元年高祖聖人出國へ碓氷せらと造り所と
 建曆元年勅免を蒙り終ふまゝ又元年乃るり上城後下城後乃
 不くと往返在りて御化益つとせ終ひ勅免の宣告と蒙り終ふと
 又とて彼不に化を絶んとて建曆建保の間ふは東國の國
 へ立城て諸方の群衆を教化せし又け城後の國へ海りたまふ
 御教辱壯ん又神しきうとるが聖人出國御在國の初け地と一宮と

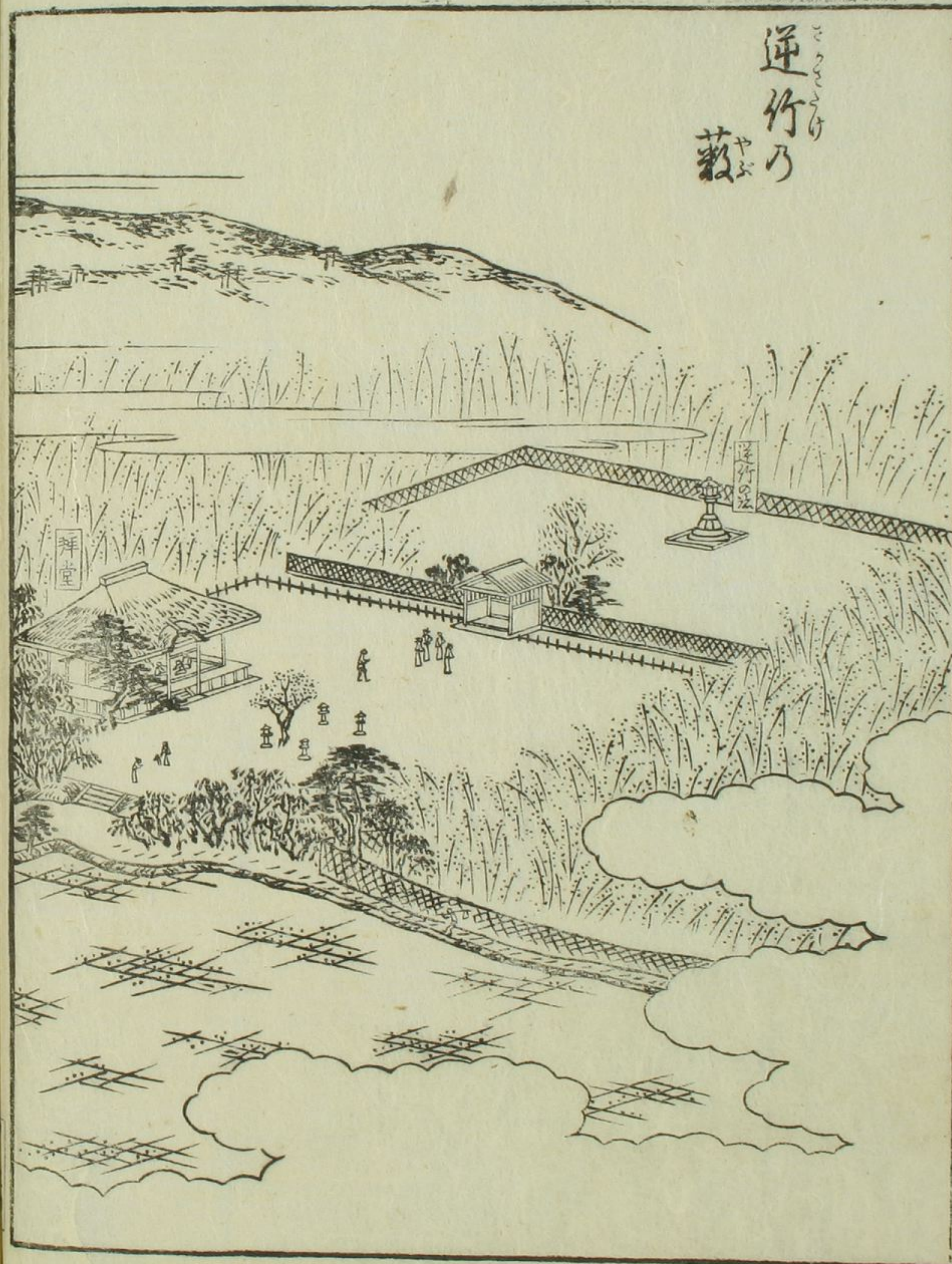


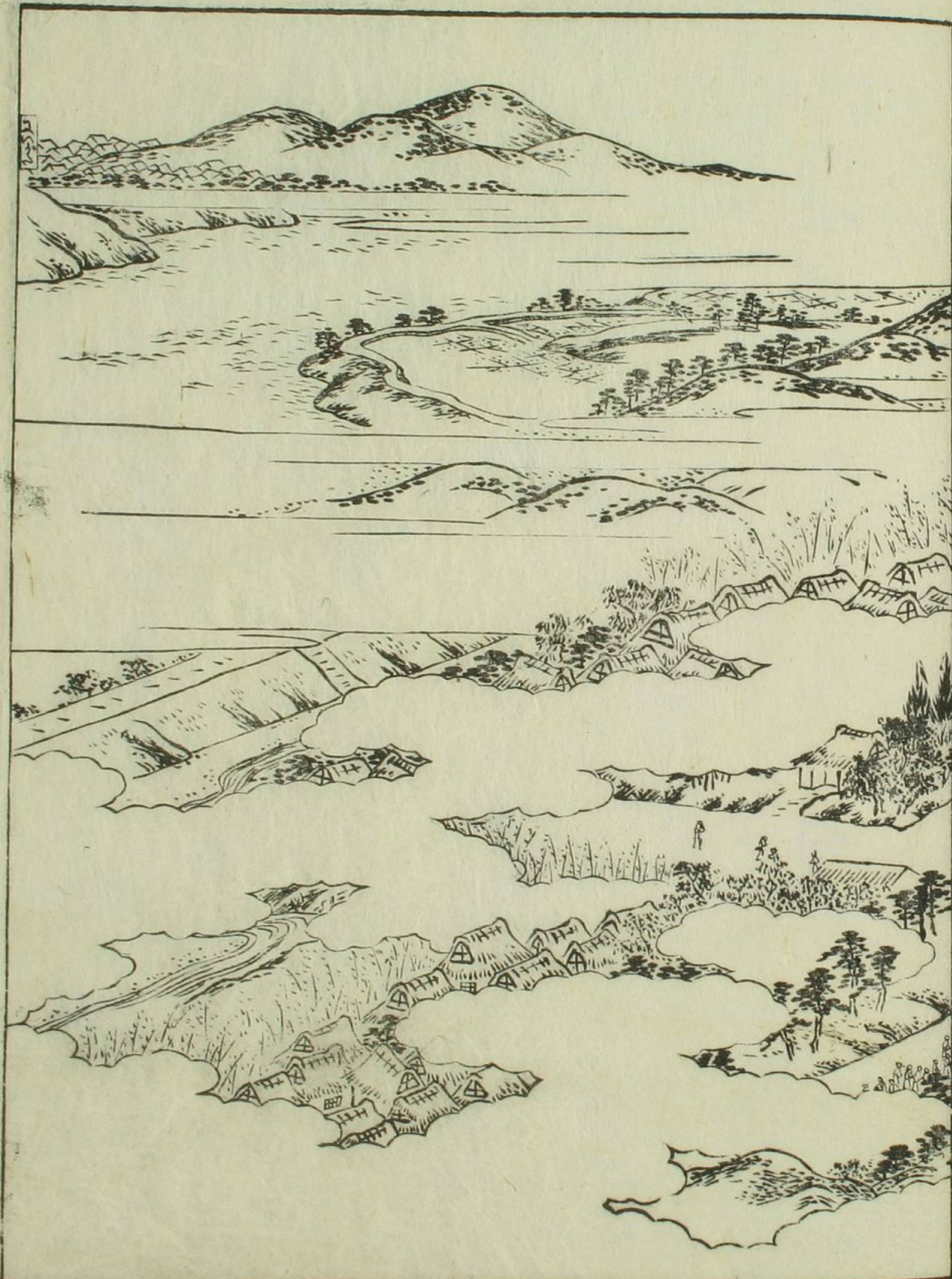


草水
の
池

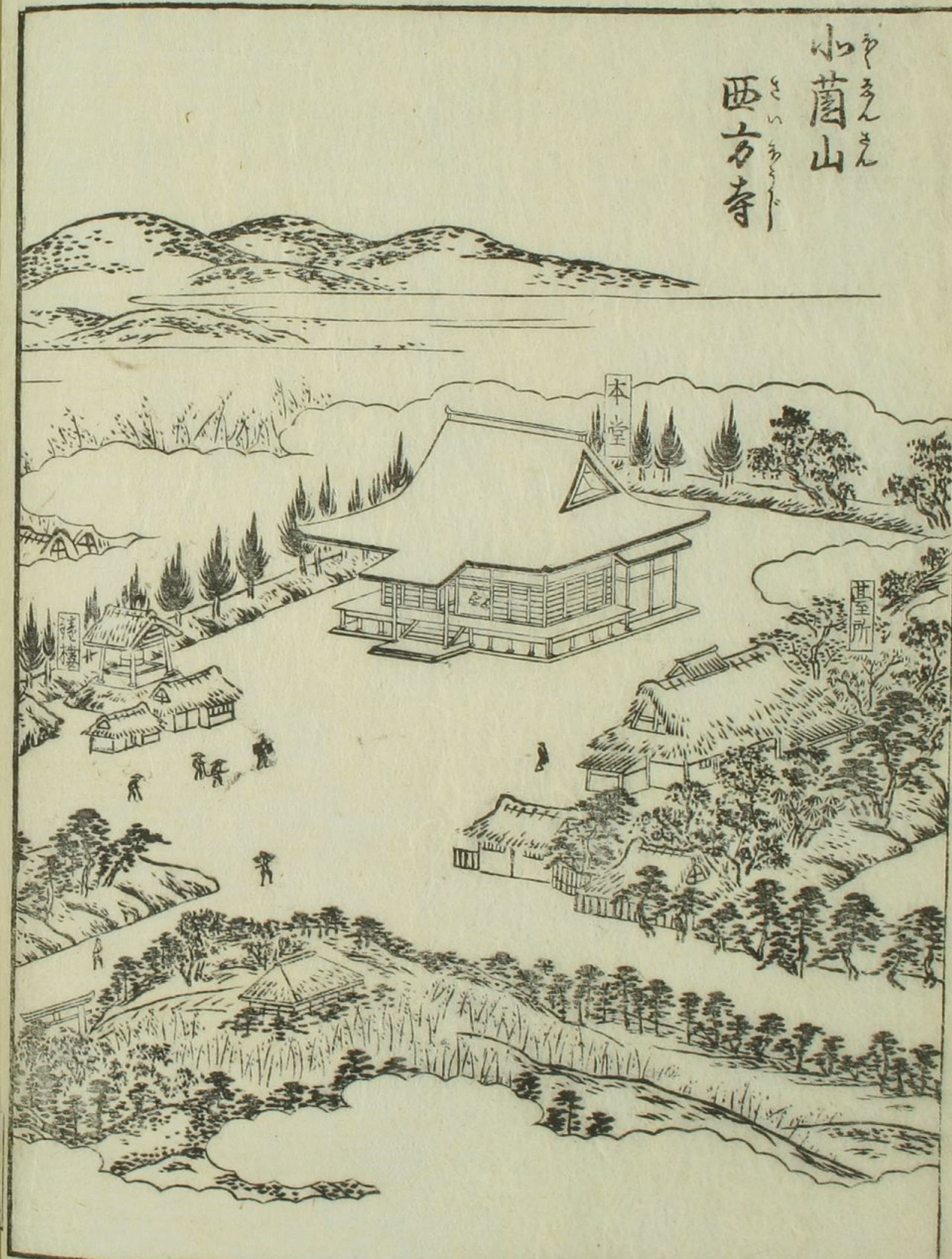








小菅山
西方寺

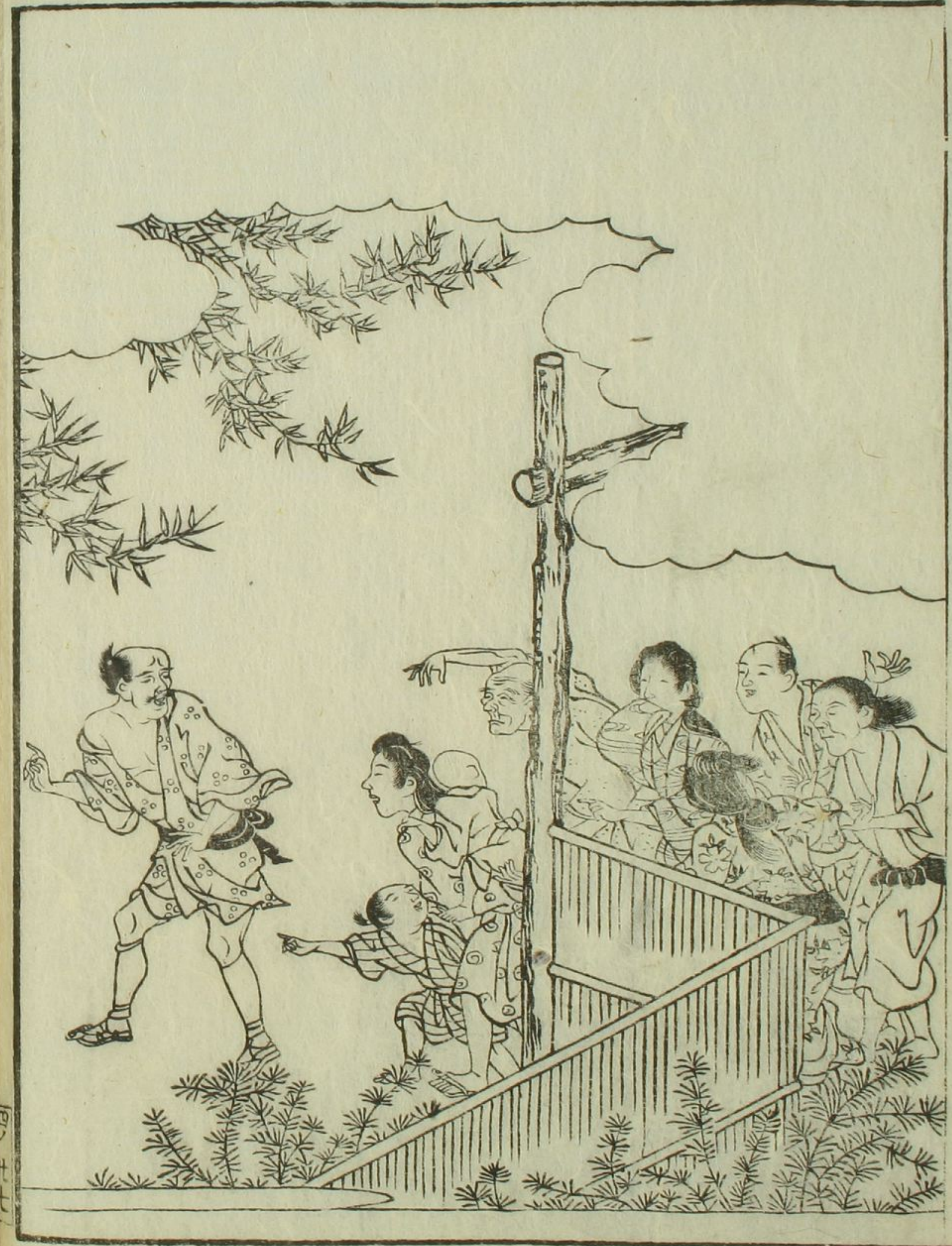


嘗て居候在りて近隣の至信と御教化にせしむるも、老角
して教を廢き御法を信じざる輩多しとぞりし程に、
歎き抄がしめて

けしき親の死に、おふらた御法の風を廢く人なり
と縁に、終ひ何とぞ、吾輩の吾輩の形勢とぞ、
や後の世に三悪石の若とぞ、
いざらやと御心の、
放逸の族に、
本教を信じ、
く輩、
久安、

て宣ふといふ人、
常がとも、
竹の根芽を、
何れも、
又不思議なる、
奇異の、
ついで、
信仰、
抄、
枝、
信仰の者、
うしま、

逆竹



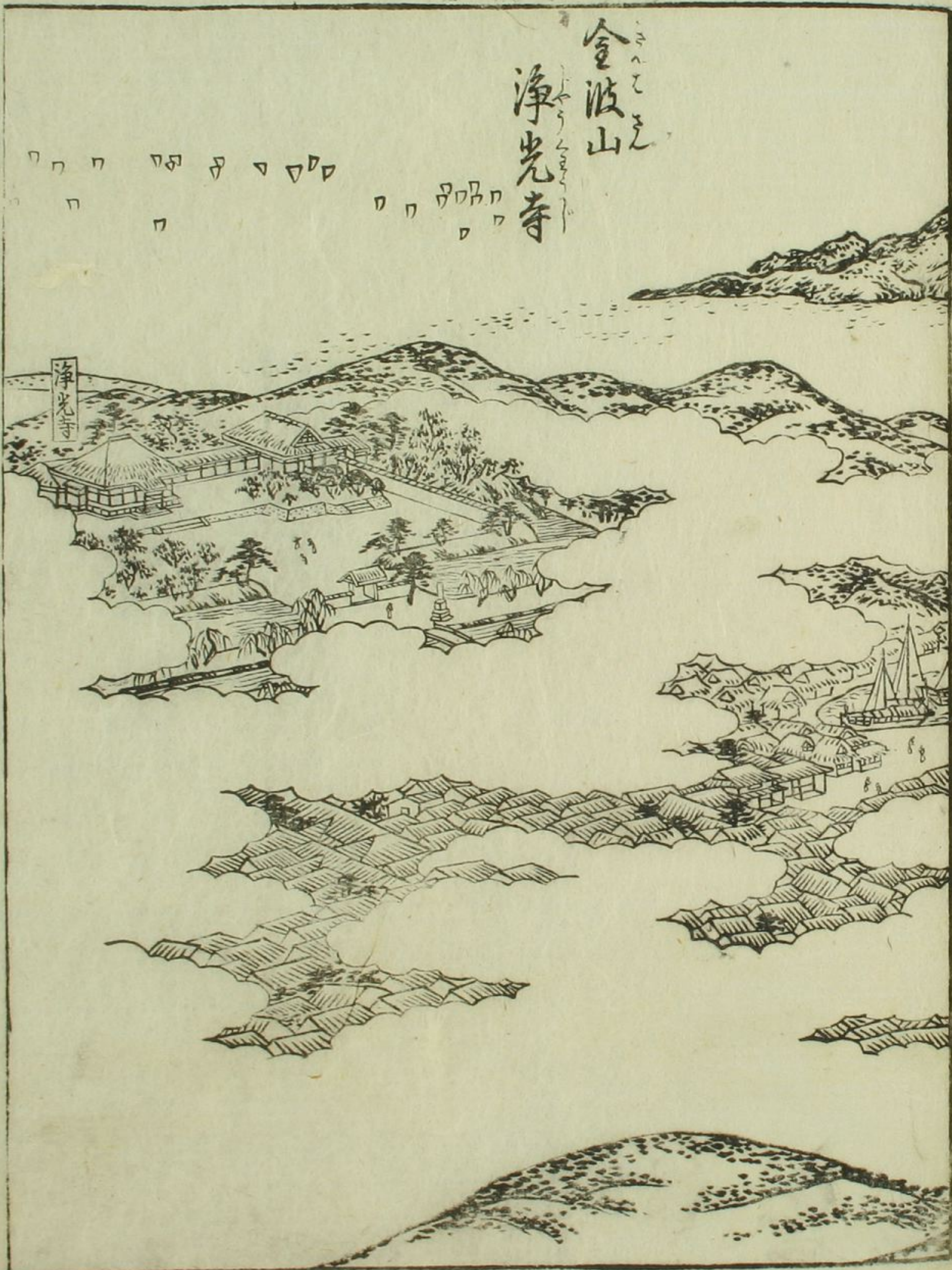
虚の筋うく又系表を返し系表うくむきを中より運し
又枝の付る竹も同じく又の教の南山に十間斗東西二十に
其竹林の角又六間に方の空地あり其所は竹の勿論一
葉も生ぜば是聖人御住居乃跡くくつり順徳帝御幸
一湖の馬吟の池あり教の中又馬紫ぎ梳く樓の老木あり
高祖聖人の掘りお母もけとろろあり正保三年の松平山より
命令り川く御敷地は石燈籠を建路人○頭折言記及古の表
又云城後園満承とく一石を建路人津光寺と号は是
勅所所之又なる屋地院と中を教貴揚御幸にあり彼所
の紫竹はうきより今又紫茂せり佛圖の其後れい今又葉一
茎も生ぜばとる人諸人多くなふものこと云○抑け枝の根と
生じたる其例は徒若聖徳皇子御母若間人室后を載り

後、御所を地より立ち折言て回く若滅後、佛法興隆とんき
るんは枝根芽を生し枝系繁茂せよと保して御校今に至
て其縁其とと愛して又系本と名けて河州志るがの御廟
おせり城智の山外外者の跡不ふは今又葉本一茎も生ぜば

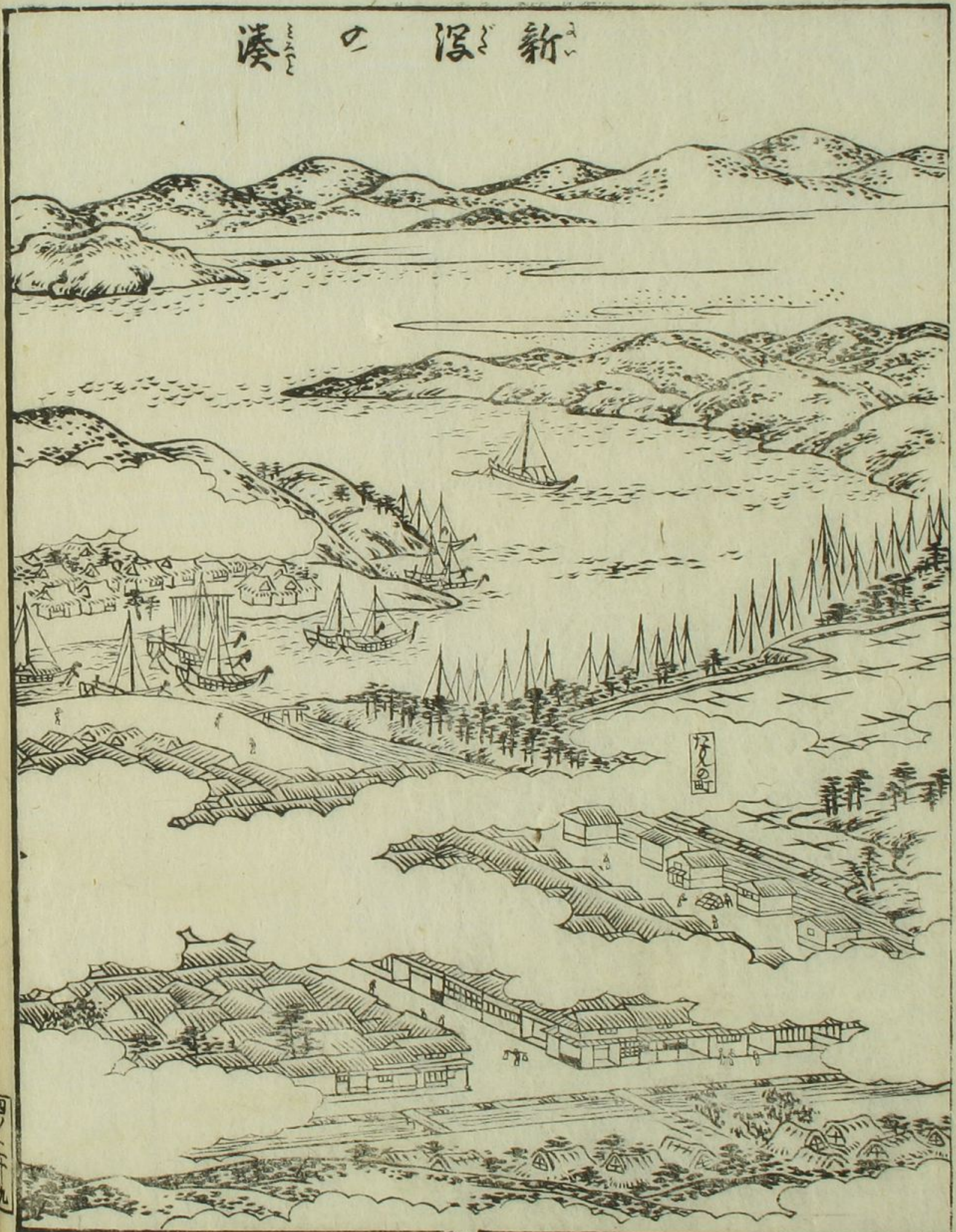
とろり

大寺池邊 蓮竹 三度粟 八房梅 弘智法印 蓮龍 是等公さし
云信城後の七不思議とくつ 按蓮竹三度粟八房梅の實なる社屋
人の慶徳系代家門の聖恩と名をせりゆら勝瑞と不思議と龍は
きし可之次で弘智法印の八定是又其外とくつを一中寺池邊の石
又記とくつ漢去より其教多く今地元のまうにありのうり
不思議と唱(勢)くべき小つは龍龍のふり古書小つ人にして
又法解の地のふりふりて佛釋慶徳の靈異と同日は流はるこそ
勿辨はしとやえりん

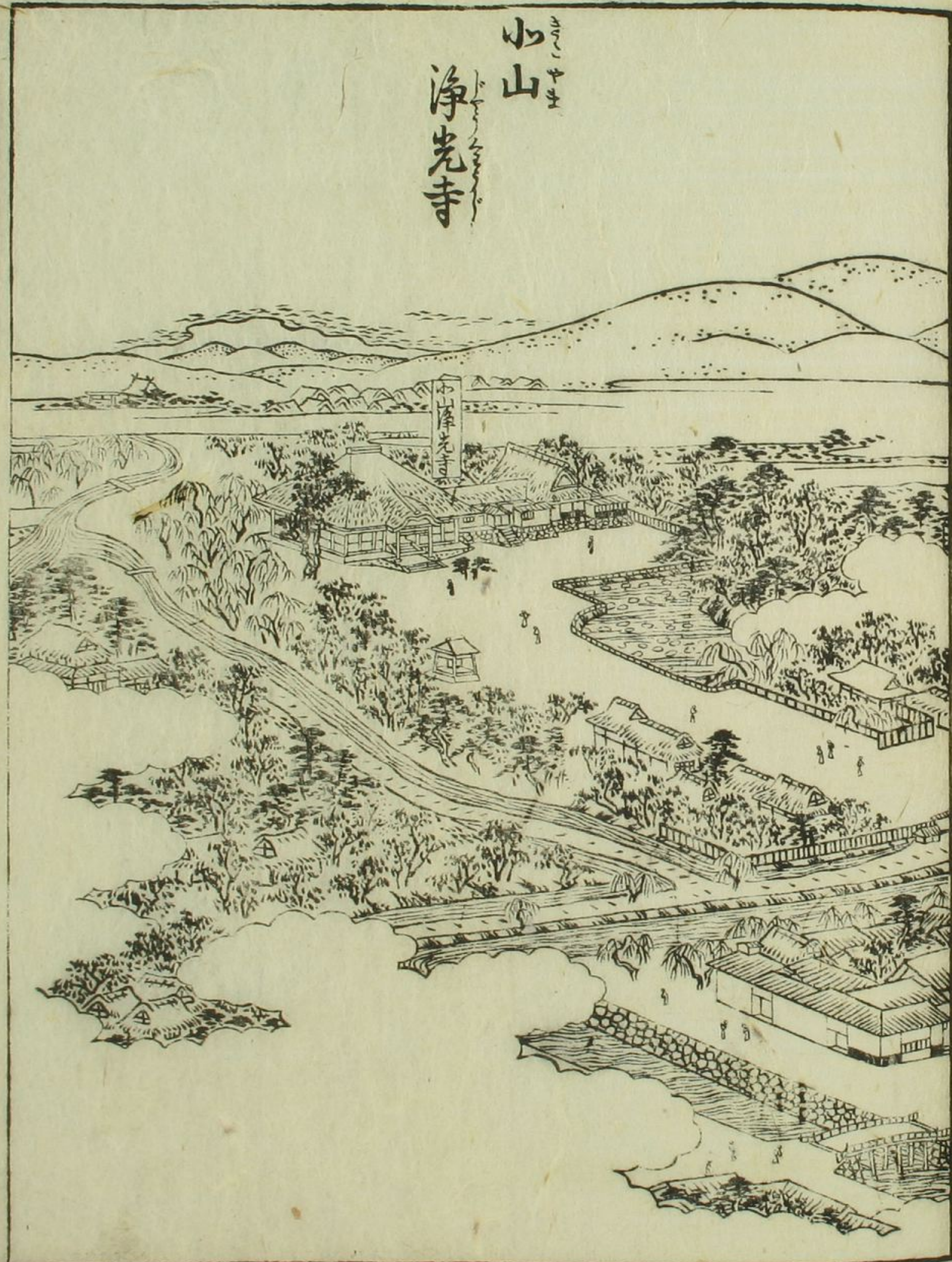
北蘭山西方寺 東流 日所あり
鳥屋院と号は奉堂十二間九間 右又蓮竹の御舊院



新 深 口 湊



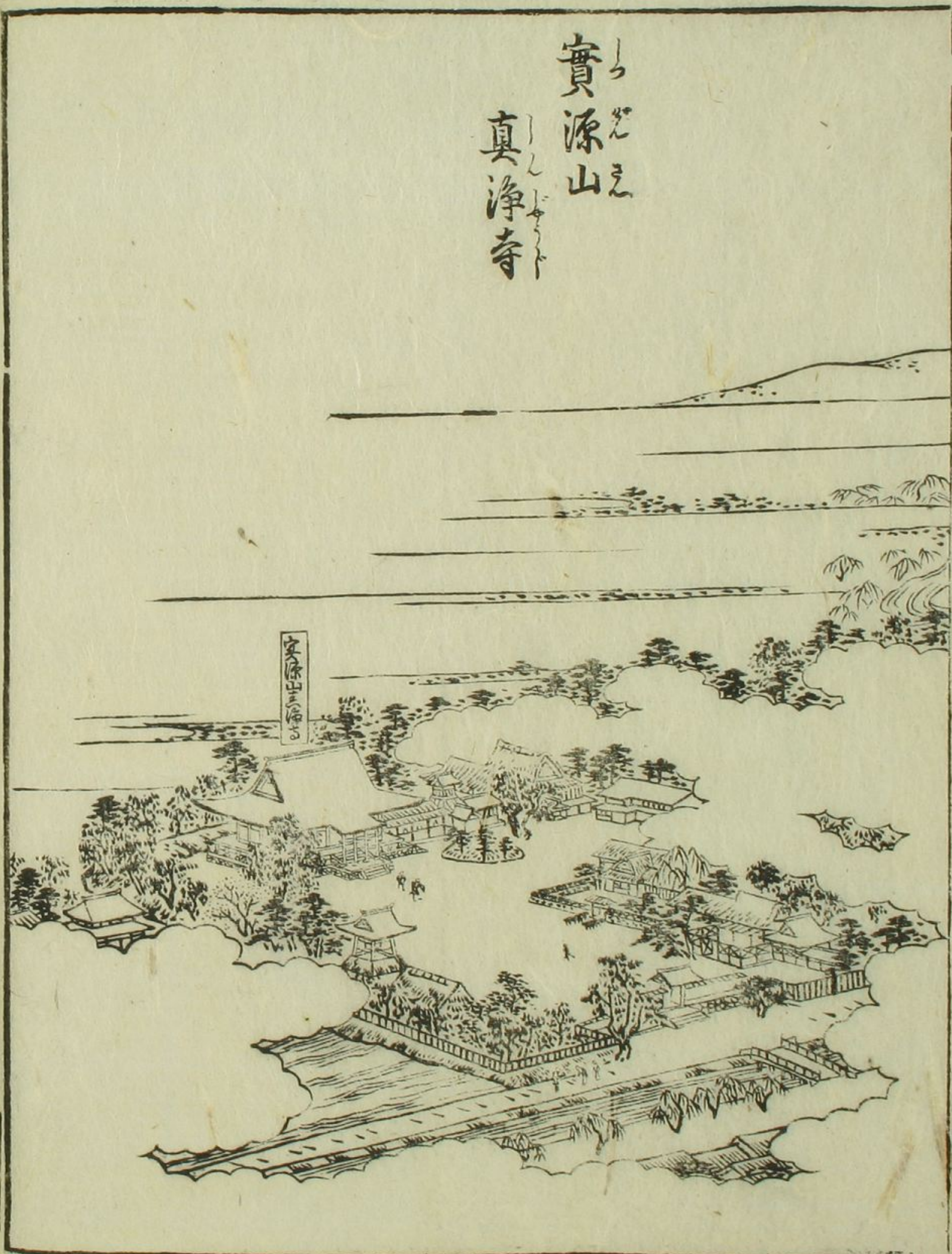
小山
淨光寺



〇 〇 〇



實源山
真淨寺

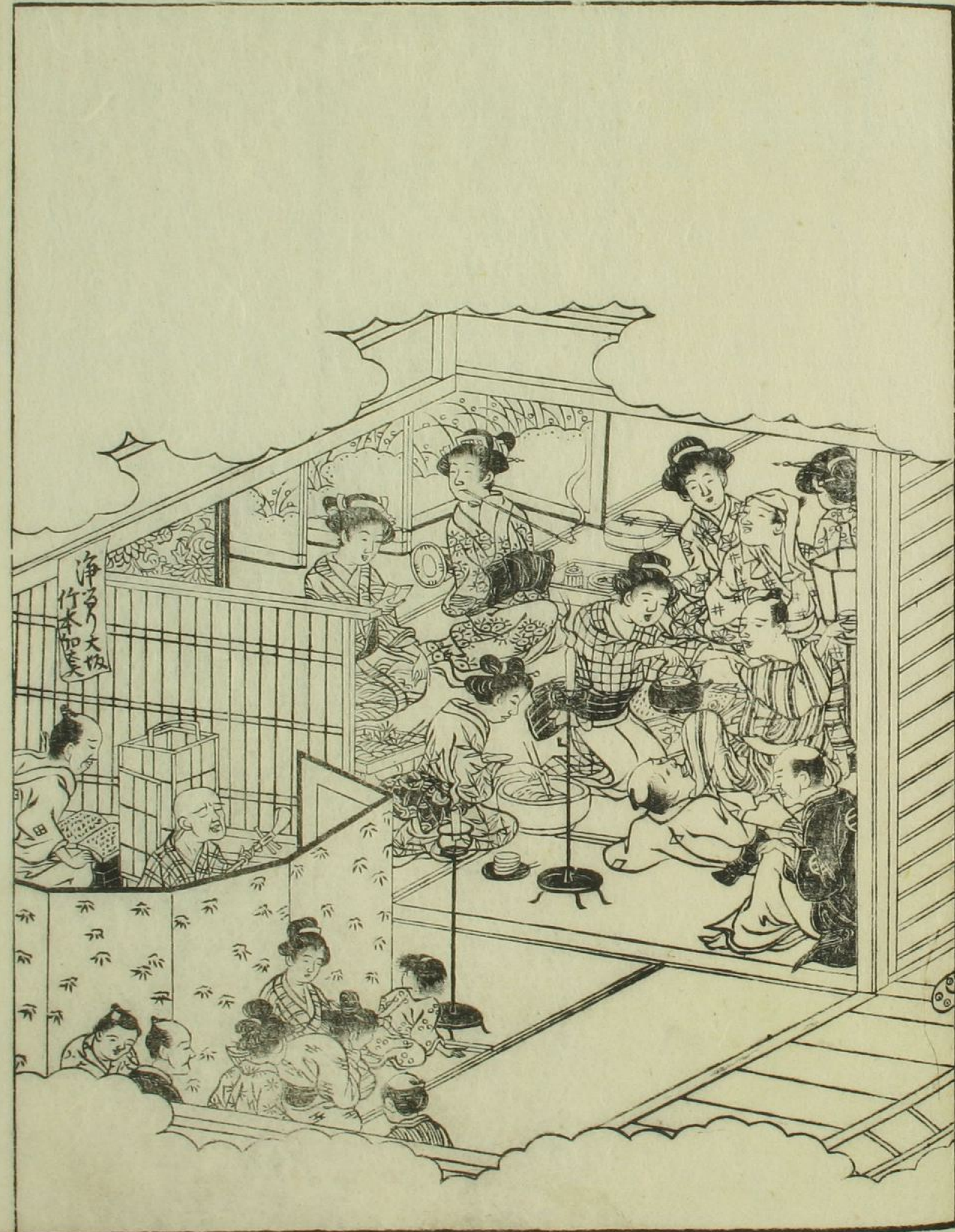


此院の支院所也此寺は八竹此系竹深分竹一重竹とて蓮竹の教
より出たる松竹と傳来せり 高祖御真筆十字なる号を安

名に 畫像本なる二幅 蓮如上人 御筆 蓮如上人 御傳繪本 蓮如上人 御筆

北山淨光寺 西流 高祖御一筆新撰あり

本堂十一間口面僧坊二區 人皇八十代の聖主順德帝乃
勅額所也奉る阿彌陀如来の佛帝の勅額安座の靈堂あり
一承元元年丁卯より高祖聖人當國よりケ年の間在國坐して
多層の里より一院と御建立の上御化存りてせ給ふ彼竹松
根芽の生せし奇特遠近より安へし諸人奇異の事いを如く
系指群集するの故の集りが如く其朽く兼久三年の
曆順德帝依後國へ遷幸はしく聖人の化導遂行の奇
特奇叡聞に達し此御坊より御奉りてせ給ひ即聖人の御



新鴻 しんこう
 三乃町の さんのみ
 宿屋の しゆくや
 圖 ず



教化と交々せ給ひ神更に念佛往生の安心と得る所ありせむ
ら帝院嘉福仰の所より地震轉として鳥屋院淨光と
勅額を賜り又御守の御奉る黄金の弥陀佛といは院に奉納た
まふ御製表

いちらるびくとも素とけては香の香座の所より霜結らん

これ今の香座に送竹乃御坊乃舊地之に中古は縁ありて院と
け所又移し高祖開建の御坊順徳帝勅額所と相續とと云

○蓮如上人遺徳記の二口先師三十又歳乃至とより北山鳥屋
院淨光寺に入給ひると云跡を見給ひて感涙を交へ給へり

とあり○靈宝品目院淨光寺十字名号
る祖聖
人御奉
○恒立室中の阿弥

院佛日御○六字名号
法持上人御奉
○若守法持對座の御額日御
○蓮如上

人自畫御額○日上人鳥屋院の御書
送竹
先即被救ふせり竹
乃即下り送と云

の竹
黄金の弥陀佛
順徳帝
御奉
○順徳帝鳥屋院御詠歌
御震
轉

金波山淨光寺
西流
鳥屋院より一里
新澤と云

鳥寺の新澤鳥屋院淨光寺と号く彼を鳥屋院に
御坊より此地より移る所之山淨光寺といは緒乃寺より

御弟子浦原法介相續せる云とあり日所日号ありて
山淨光寺と号く浦原淨光寺と号くあり

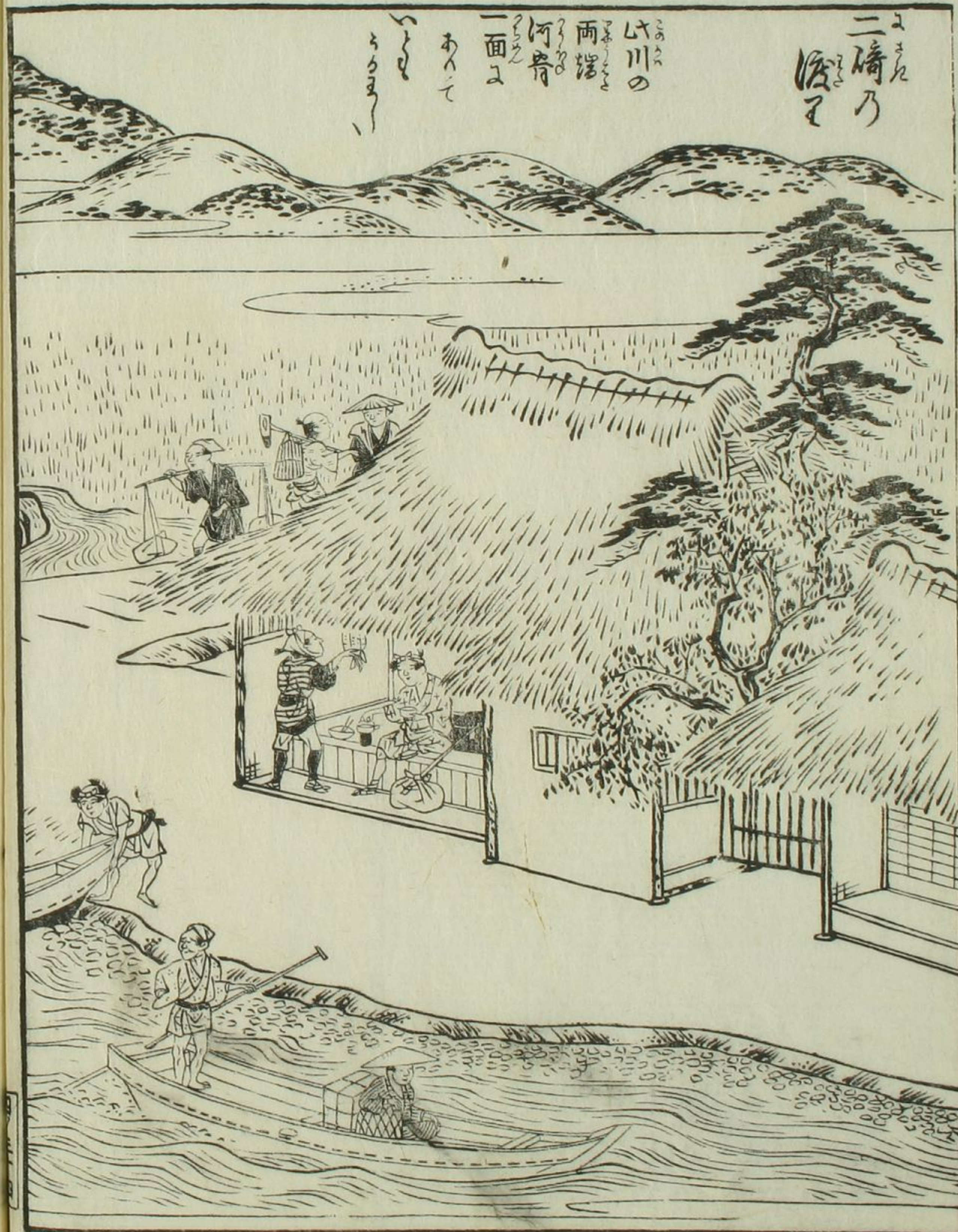
○高祖真蹟
十字名号
御光の中より十二光佛
ありて浦原法介と云

○弥陀の号
法持上人
○六字名号

蓮如上人
乃御奉

赤泥眞淨寺
東流
日所あり

鳥寺の聖人の御弟子明慶坊の用基之抑明慶坊の俗性も
常陸國の僧人土屋又郎重好と云源氏譜代の勇士ありしが
備老日究の聖妻を去り執念の妄念却て教善提心の善縁



とあり終に出家道世の身とあり高祖聖人當國頭城郡に過とる所終
いとほしてあつたが其おろしに高祖聖人當國頭城郡に過とる所終
ゆゑを終ふゆゑを既と彼を以て即聖人の御教導に終り
速に信心了解して真の御弟子とあり法名を明慶と賜りたる
まよりしと聖人東園へ被き終ふ時供奉しなう信州水内郡赤松
とつふ所にいづる爰と抄ひと聖人暫く化後と能く終り諸人信
仰とて奉教を信じ念佛とる者多かりたるが聖人又爰を去て
赤松と被き終ふと終り諸人御名を稱えと憐れと悲しむるを聖人
明慶と命じて宜く御爰と留り予が代りて奉教念佛と弘むる
一と門徒の衆中ととるうと明慶の教化予と同一とす
異方とるゆゑと能く終ひ教品の御遺物を賜りたる明慶師
命と背離く爰とけり而に留り一とを記して真淨寺と号し

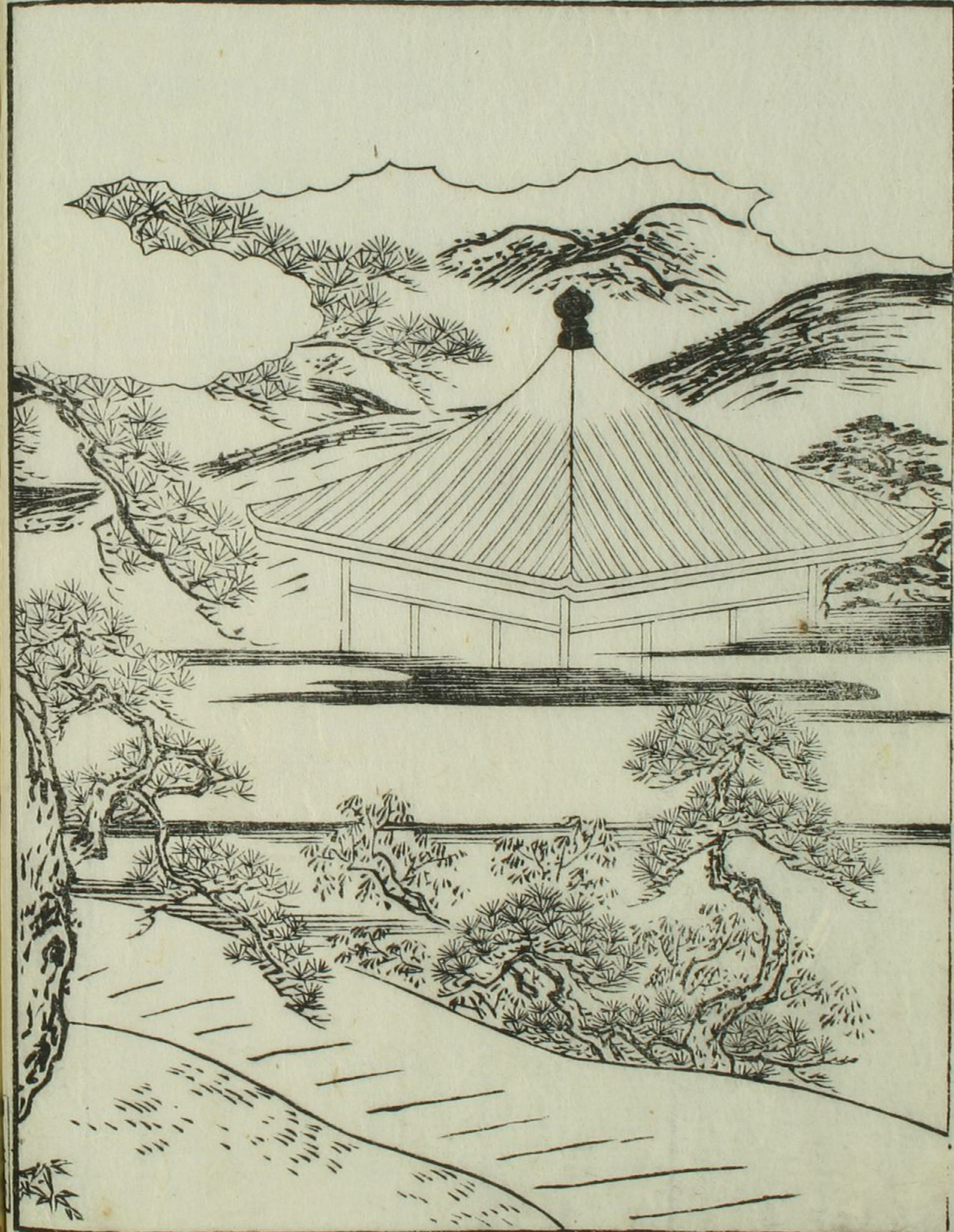
専ら真宗念佛と弘通せしゆゑが中古に謂はるる寺とけり不
移しゆりぬと云 宝物と宮とありる像 聖人 十字六字石号
聖人 茶碗 香合 瓶 以上高祖より明慶へ賜
けり 靈宝教品これを略し

長崎山真宗小寺 日所あり けり 寺蓮如上人御舊法也
狐後の園に大園ありてけり 彰徳と号し 庵と号し 多く小園あり 一帯の地あり
別して東西奉教寺 市末寺の寺院 教百ヶ寺あり 其後大寺ありと
又ともむ 聖人の御遺像なき寺院ありと云ふ 此れを記し 凡そ以下
の園にも是と準じん

○彰徳の狐後寺一の大庵ありて 彰徳教の御中より 托女の手掛ありて 諸國
の高賈入つて 此の園中の 凡そ 狐後の 教と得て 在り 凡そ 此の園の 地は
よ入津 或は 洋とあり 南郡 松尾の 遠園へ 従来 融通自在の 聖なる

佐々木子堂 彰徳より 二里 佐々木村あり
奉る 聖徳の子の御像ありて 高祖聖人の真像也 市長 二天の寺

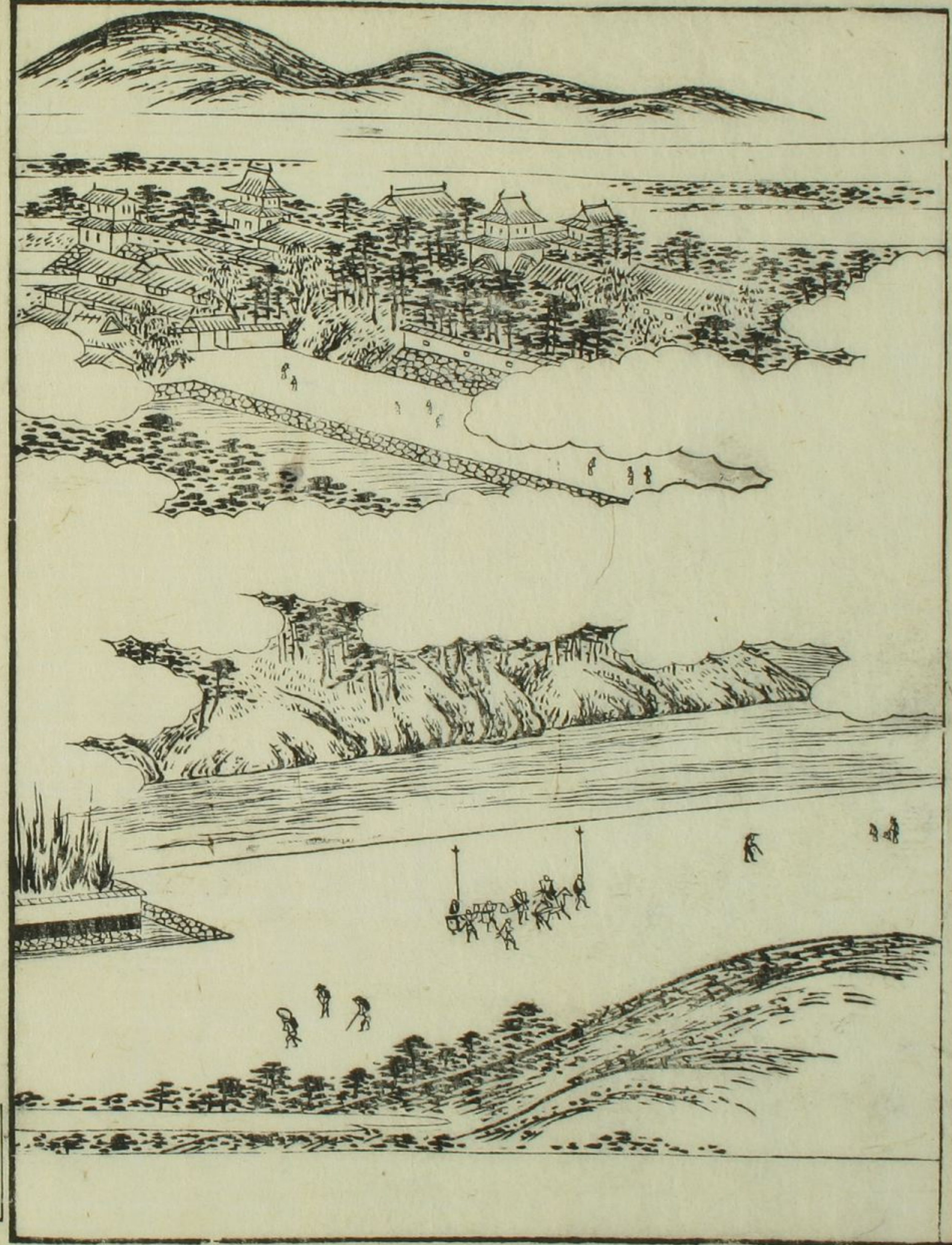
聖徳太子
靈應



瑞いらちろく在^ま在^ま在^ま園^{えん}郡^{ぐん}こを^こ門^{かど}く^く常^{じょう}事^じなる^{なる}新^{しん}後^ご田^{でん}の^の備^びは^は信^{しん}濃^{のう}守^{しゅ}別^{べつ}と
信^{しん}仰^{やう}多^たく^く供^く料^{りょう}八^{はち}石^{じやく}と^と寄^よ附^ぶせ^せと^と取^と元^{げん}孫^{そん}年^{ねん}中^{ちゆう}の^の以^い新^{しん}後^ご田^{でん}の^の所^{しよ}と^とも^も
新^{しん}後^ご田^{でん}と^とも^も入^いる^る貧^{ひん}乏^{ぼう}百^{ひやく}姓^{せい}の^の多^たく^く夫^{ふう}婦^ふか^か中^{ちゆう}に^に子^こ三^{さん}人^{にん}あり^り又^{また}八^{はち}旬^{じゆん}は^は近^{きん}き
老^{らう}母^ぼたり^り亦^{また}目^め盲^{もう}たり^り元^{げん}孫^{そん}夫^{ふう}婦^ふと^とも^も且^{かつ}堅^{けん}固^この^の信^{しん}者^{しや}あり^り
た^たれ^れと^とも^もい^いつ^つも^も先^{せん}世^{せい}の^の悪^{あく}業^{ごう}少^{せう}く^くより^りた^たん^んと^とも^も門^{かど}で^で多^たく^く新^{しん}後^ご田^{でん}を^を
去^さる^ると^とも^も少^{せう}し^しと^と宗^{しゆ}旨^しの^の按^{あん}は^は背^{せい}を^をび^びて^て津^{しん}佛^{ぶつ}は^は後^ごと^と新^{しん}と^と
つ^つの^のつ^つの^の飯^{はん}は^はも^もせ^せざ^ざり^りし^しが^が年^{ねん}々^々困^{こん}窮^{きゆう}して^{して}一^{いつ}と^と皆^{みな}去^さる^るや^や如^{ごと}く^く地^ぢ
既^{既に}奉^{ほう}る^る年^{ねん}貢^{きん}金^{ぎん}を^をこ^こと^と未^み進^{しん}は^は如^{ごと}く^くた^たれ^れが^が石^{いし}の^の底^{ぞこ}を^を是^{こゝ}と
左^さ智^ち地^ぢ既^{既に}納^なめ^めた^たれ^れと^と如^{ごと}く^く格^{かく}月^{げつ}中^{ちゆう}旬^{じゆん}は^は石^{いし}の^の底^{ぞこ}を^を是^{こゝ}と
教^{きやう}度^ど僧^{そう}侶^{りよ}せ^せり^りか^か夫^{ふう}婦^ふ種^{しゆ}く^く心^{しん}と^と碎^{さい}く^くと^と人^{にん}と^とも^も金^{きん}子^こ債^{ちゆう}ひ^ひご^ご
く^く討^{たう}ふ^ふを^をた^たて^てて^てて^てる^るく^く老^{らう}翁^うみ^み也^や是^{こゝ}と^とも^もき^きや^やう^うく^く急^{きゆう}難^{なん}と
如^{ごと}く^くし^しお^おり^りく^く千^{せん}五^ご歳^{さい}は^は如^{ごと}く^く娘^{むすめ}の^の日^ひ以^い殊^{じゆ}交^{かう}押^おは^はしく^く若^{じやく}心^{しん}深^{しん}

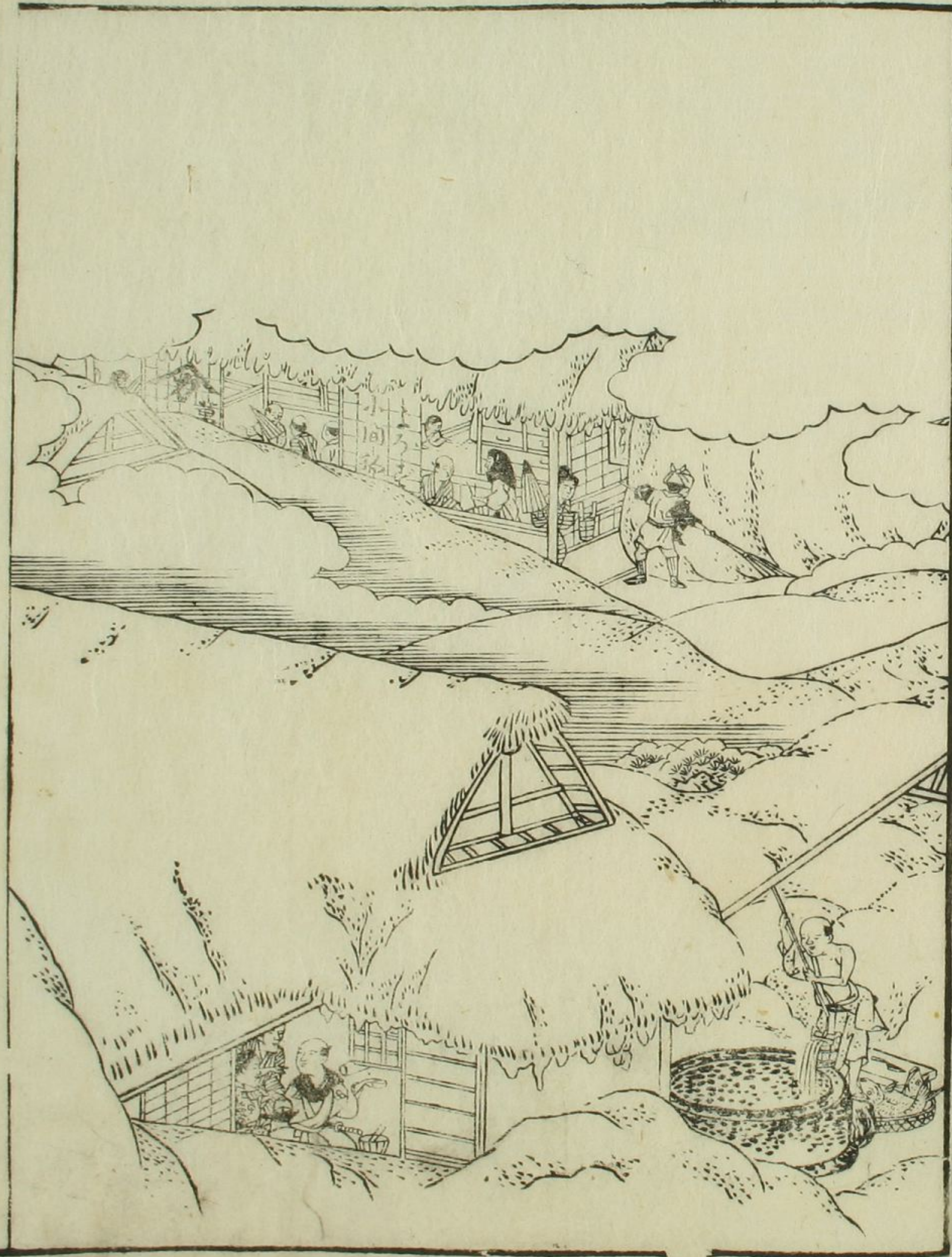
きりのとたれはまのころ両親の幸甚か見ゆくも其の比はまのころ
格女と賣はし其代を以て借令と僕んとおひ売めて此事と
親と中たる小夫婦の者も親と息子と賣んりまともも不
み悲しくとつとつと年老たる老母の彼借令のりと案
如い後小女ひとりよりうがはしとく足蹴るく其が何は
て格月廿日又養女をくく娘を誘ひ連と新後田の隣に
知者乃若とたのく又年と限り彼女を格女と賣て其價の金
を清た心るく次も娘と別と新後田へ帰る日もとや七ツ附
おひたれは其ををやく急ぎうる小新後田と依る本村との中
つと善やとれた日親のちやくも山の端は沈と深しうは餘
心いそがしく悔りおし人も人家を放とて縄をうて盗人三
人又盗るる小河も切けは養女を捕へ着ようけたる金子を

新江山
託明寺



集いたりとたり我女のみにとらるるは天子の叫び地を驚か
てさまじく歎き流るれども又も盗賊どもに身もかたは
るたけり何國よりうら十に又歳こゝへ少年の来りて彼
盗人どもの先を立ち見せしが三人ともお倒れたりは彼少年う
むい返し金と取りし我女を返して中やう汝もさより我とれ
とらるるははしとんと阿弥陀佛と信じてるが今今金とえ
返して得るる也尚好されども先承るるれば仇の本の去り堂り
今宵と曉して帰るべし我の彼堂を候りのえとてかゝること
してゆりたり我女の集えし金再びむいし給りたりゆり
難と骨髄に徹してまゝとて彼少年の名も好福に流るる流る
言ふも盡さばて帰せしむの意りてと流言せんとも急ぎ仇
本堂よりむいしが堂の辺りを易くふ彼少年と見しき人も久

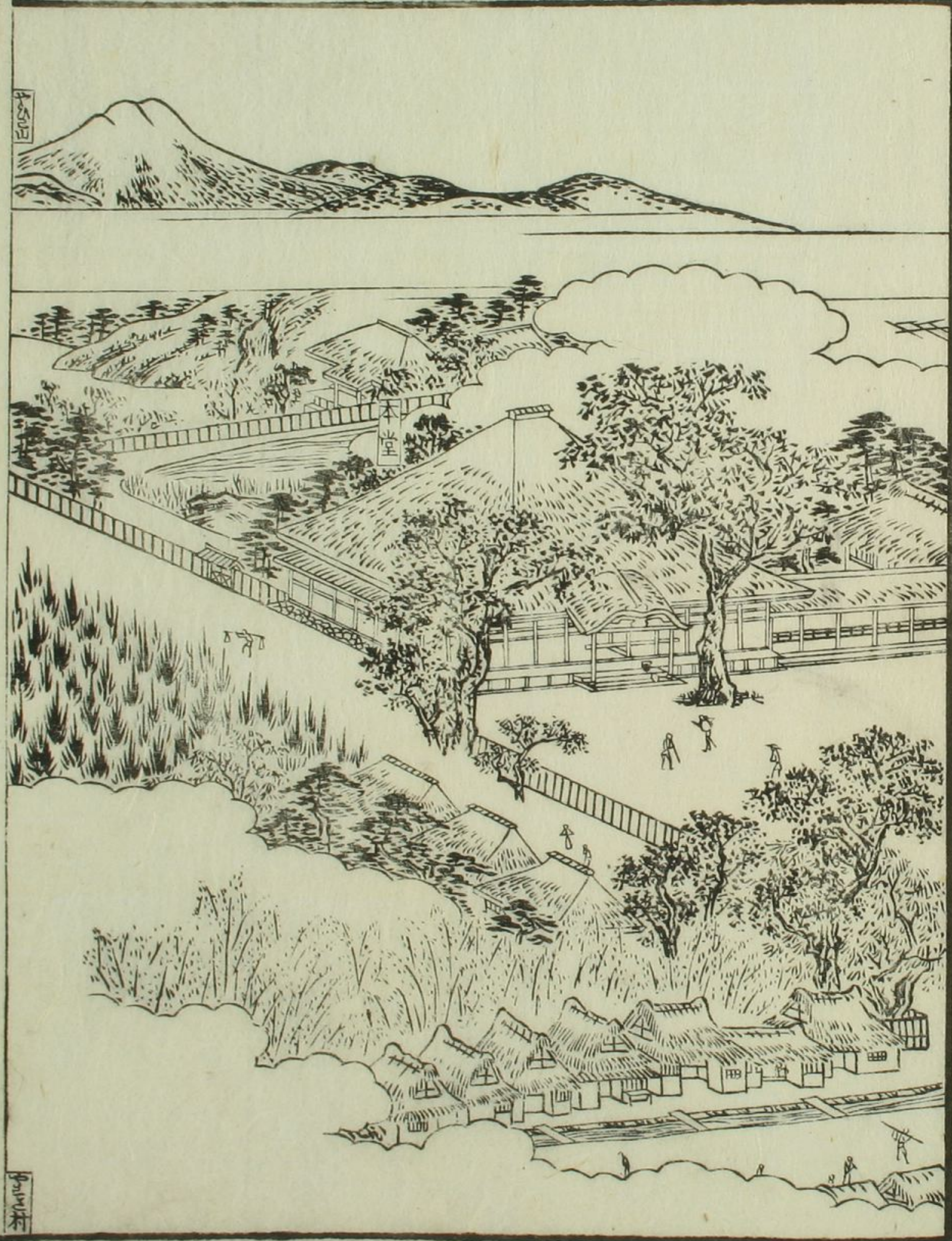
ざりたるは堂身より換子を物語りて花換の少年の人やゆ
とらとらと半守歎息して云やうそれこそぶくちなりてお
まじく先堂へいへる像と拜とまうとよとらふは心付てその
彼右子の為像と拜とまといわすりくもち子乃御堂は流るる
く付く押しつるふぞ孫ち子乃御化現して急難を救ひ給り
しを難くおひ我女も好ま日影後回へ帰てとらとらとま
屋のりて備金の糸返して彼子の御利生を報ひたり我
元来をまよとむしつるふと孫陀佛を信じてるが今とら
まひし事と人はいよとらとらとらとらとらとらとらとらとら
信心たくはしく信びつる此の諸方へ佛人まで人々我女とあ
まじくつるが次子と幸ひを得て後年大福人とありか
娘も徳の商家の人は豊せりて了るるのこゝろありつる



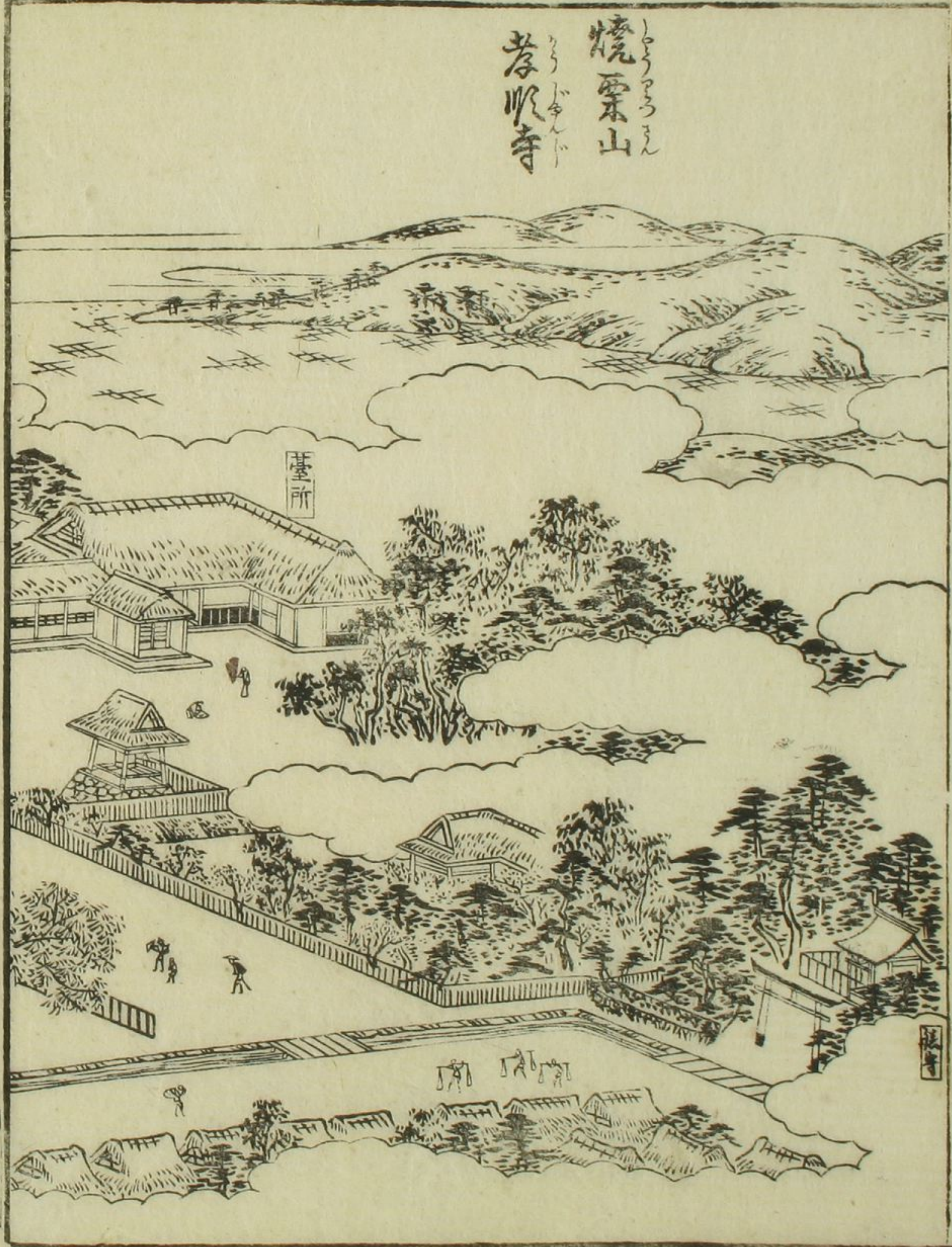


燒栗 やきぐり
の
林 りん





燒栗山
孝順寺



今世結りて仰らるる我今も此の弥陀地力奉報
 乃法末世又整んかへて天下又満ち極重悪人の弥陀本
 願よ念ふて浄土又生るるの次第なり今こそは焼
 栗根芽を生じ亦も年毎又三度の葉と結ぶ廣野の栗林
 と物ぶきこと成し終ふ栗としてけ栗高祖の御折言又遠に
 年又三度の葉と結ぶ繁茂せり又又抑ひて國人奇特の思
 ひは信と弥陀聖人の御教奉り又遠りて凡そ修行生而踏平の疑ひ
 ばしと渴仰外より感感信と成し今教百年と歴こい
 つも聖人の御折言に依りては入町の間と入る三度の葉の林
 ともさう去とは永不成佛の二乗の佛果を證するのみとも
 惡逆の凡そ五障の女人いふを解脱を得るの附けりんや猶も
 弥陀報世の悲観佛智不思議の妙益を信樂する附け凡そ女人

燒栗山孝順寺

三度栗之圖

け栗とてわれりて三度栗といふ
 り栗の葉又かまうたるゆゑ
 其の葉の大いなるゆゑなり
 なる此の葉よりゆしこのを
 二番の葉と用き実といふ
 け栗又なるなり大いなる
 なる附けりてわれりて
 たる一葉の實いと其
 いか破さる栗の實
 外よりこれぬけ附
 捕の葉に第三番の
 葉といふ三度栗のこり
 秋冷たむく後年三度
 の葉の實よりざるもあり冷た
 返り年一二三の葉向と遠に
 悉く實のより滋養樹と謂る



ぬの
布乃名号
の仲素



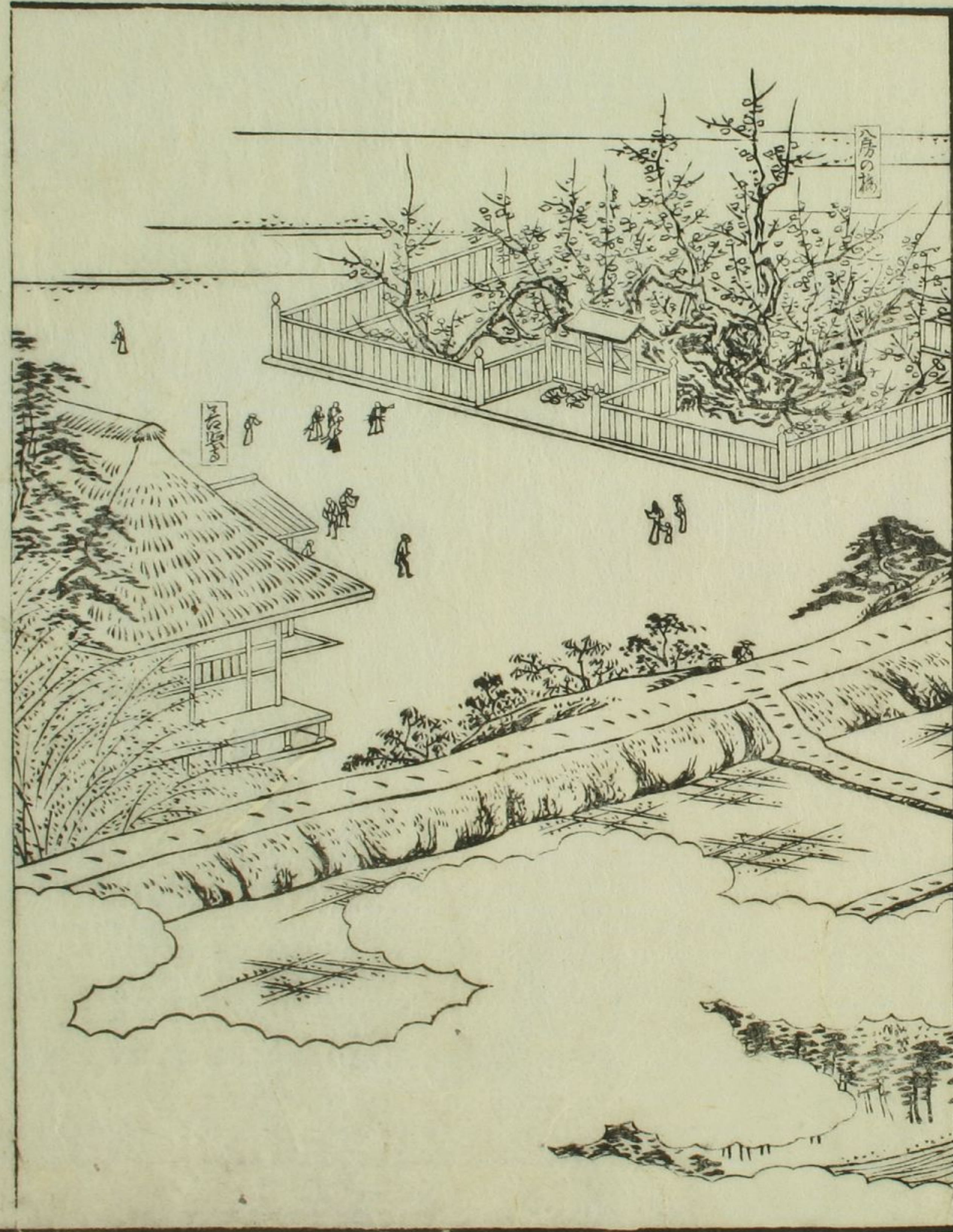
長福寺并に奉養寺并に孝順寺と不易の寺号と免降
ろくく安ん佛圖を祀立んとつり○六字名号
空名号 紺紙令既聖人の御号 ○八字名号 繪像 弥陀 釋圓堂 ○御自畫
等身御影 顯上人 ○上宮を子々像 ○竹布の弥陀佛 法道上人 ○高
祖御本像 蓮如上人 ○蓮如上人自畫御影

○寺流、曰此老女の後、邊綱が主、源三親とつる忠武猛勇の武士の妻を
親ハ源三位の左衛門尉の臣、つて主人、親高倉の宮に於て、
平家を討んと軍勢と集り、終つて山城國守、後、郡、對陣、武運、拙く
平家、流し、生、宮、せり、此、時、源三親、も、ま、ま、と、り、小、宮、流、川、に、死、し、け、り、
其、妻、娘、都、と、爲、て、小、國、よ、ま、ま、ひ、終、つ、て、彌、後、國、に、多、田、村、の、里、に、お、り、ま、
づ、き、婆、と、り、つ、り、ま、ま、の、周、忌、と、な、ま、つ、り、則、ち、親、政、と、親、政、の、命、日、
り、之、後、義、隆、年、の、流、の、合、戦、に、つ、け、附、建、曆、二、年、と、な、り、て、三、十、三、年、當、り、
ま、ま、と、り、ひ、ま、を、歎、く、誠、心、の、懺、して、ま、ま、も、高、祖、聖、人、の、御、影、に、
な、り、加、へ、天、護、三、從、の、女、の、如、佛、得、脱、の、化、蓋、と、な、り、安、心、安、ん、と、な、り、

八房梅

つるい難うりし多生廣劫のまが縁とのふがれのありとぞ

寺ハ若照寺と号く、東流、日國下條村八房山若照寺の御石
たうけ梅を前に懸流して十間に方むり、石垣と構う
其中又六百餘歳の年曆と經まじり、本勢強壯にして珠
多重の紅梅、鮮々英々、葉ハ一花又八葉と生じ、味ハ鹹く、
世信乞と八房乃梅と稱し、當國七不思議の一箇と云、又珠
掛梅とく、殊教の房、飛又咲出、梅花あり、○柳ハ八房の梅と
つる、往昔高祖聖人、當國御化、守の初鳥屋、控院、在、し、
御教、勅、み、つ、り、小、遠、近、の、道、信、日、夜、又、系、集、して、聞、法、得、依、と、り、
釋、多、世、の、附、八、部、衆、の、佛、所、又、信、で、つ、り、が、じ、
義、と、り、つ、り、武、官、殊、に、聖、人、を、降、依、と、り、重、み、
適、居、信、中、さ、し、け、

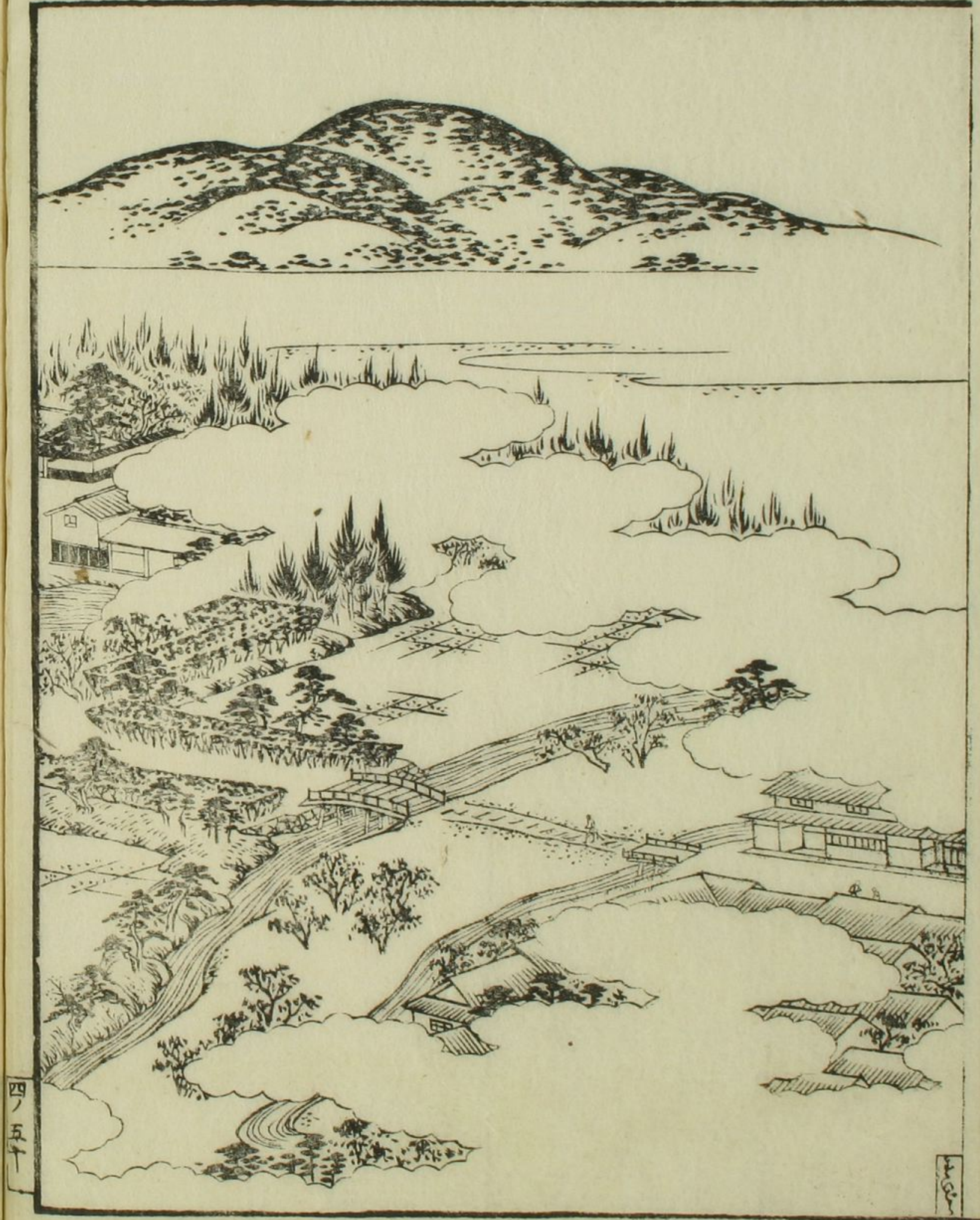


より聖人彼地より強き終り其中後小幡村在富門
者の家にも多き終ひるに亭主大に勤む聖人我茅庵に入終り
得難き幸なり何と云ふ郷土に心はくあせきも俄の
て御供養中及びのもしは御膳飯を炊き梅漬の梅と糸流進
聖人彼が心の涼切を感じ終ひ終ひに白ては梅の葉と地と埋
諸人は教化し終り予が今身列宗法の佛智に叶ひ弥陀の本願未代
弘興一悪逆の凡夫又陸の女人又区て弥陀の御圓はは八葉の
るのりといは梅梅より根芽とせして末世とも繁茂一花は八
公家の飛と如くは是る法流の是流と末代は是る折ははは
るるが濃又如來の苦巧安又是る聖者乃真言露路斗も遠り
て感應神靈にやまは深くは梅年と経る小幡の宗人留りて
大樹となり一花八葉を結びる諸人青葉の如きは信心

と云ふ「弥聖人乃御教化を信敬」凡夫世入の本願と欲ひぬ
今聖人御入寂より凡夫百又十年俾去真宗の教法日
又物不隔」年々又増上」善くに海は仕んるるは梅樹の志
まるる小幡并を合するごとし」又生ふる梅を喰ふ其味ひの
鹹」是梅梅の生ひ出る調と知はるべきなり

宝曆七年の春 予 師圓亦御齋法巡拜しては小幡の里に
一夜旅宿せしがつらへ聖人安んて教を授けしを思ひ
中りて寝るる小幡乃中高祖聖人又濁くなり其御面類乃其
腹をせ終ふと釋して圓亦うつ心よ中よりいふは聖人何の御
世にてもかく御面像の腹を終るるは梅樹の志なり聖人乃御
宗法今仕んるは弘法也るるも自力の猶執又暮て安んて
少くは尺竿を以てはくもなかりのりて義也」予と圓亦この
御詞を衣の袖に綴り置心よかくん
我祖師乃與梅樹腹終人御法を聞け八房乃う先

佛性山
いねまんど
無る信寺



と詠ぐと見るに夏はあつさり 暑くともく夏中の浪は枕と涙
ていまで乾くはつらつら夏のはさまとあひまふふ思ふやうに秋はむら
りあつらふ何とく夏の中はけ法秋をつら涙又よく記憶して是
るこそ不思議なれとく云ふの拙きも初は夏のまさと流るる
さつらぐ 涙と流るるしむる難く夏はあつさり

佛性山無為信寺

東流 八房の極より一里余
下條村あり

令剛院と号し幸堂八間本為如來湛堂の性 二十に輩第十一番
無為信御坊の遺跡也無為信法師信性性の法和天皇六女の苗
裔信守源義義の三男甲斐守源義光朝羅三郎の後胤武田
玄即信義の子としてぬ麻呂の大宮司權次女子より奥州會津
郡柳津とくふそそ誕生は初年より勇猛英才群秀で自武田信勝之名
系同國縁和は居候なり信勝武時を承に山崎多集り去砂をく夏運んで
一石につらく去室と造り其中は虫などとり入る虫根と根信居とぬ

を換わりり暫くありく雀二羽飛来り忽ち後の工と板へる去室とつ
きなり集り居るを皆喰ひたり信勝これを行きて忽ちと歎息し鳴
呼法はし乃世のを換致暮るき人同の境取らばし今まは居候の屋敷は要害
を構へ米穀衣類調度を修へ妻子眷屬をまひ承く安候一方歳を
んをを新入統る小五女將妻の怨敵奉行て急要宮堅固の居宅を
美破り去代を翻し其力を殺害は目下今候のあはる令く人同の
業に足あつらるるはし美城大小も是より下と強又は高附乱世皆
く静るとく人心の虎狼のぞく漸くは他人の石版を奪んと令
我をいづ國郡と争入弱きもの忽ちよこ強き者の増勢いと
振ふはゆるもよぶり又十年の命と佛門者少し我は理と希
正しく武をまげと勇と取らんと強は強是より人治し夏
とれ涼世の中は蟻乃造りはしつら去室の如き苦惱をくさん

よりいよく明師了取信して未素永劫の若と道人は志と
と覚悟しこれらに縁の善知識の母也まよやと附く
是と為る中これら統る小宿習の善縁安まるとるく聖
人常陸國輪田の郷に在りて専ら衆生淨化を了せ給ふ
とて夢て急ぎ彼地まゝり聖人又留りて道世の志を
これに聖人信勝が心乃たくほしきわざと感し給ひ弥陀願世の
悲願の汝多とれ悪逆の凡夫と津去又逆へ給ひんがわんが一心
又称念これに安んじて安樂又生せん又又銀ひりて説と細
と淨教戒けりせられ多く信勝これと徳圓し忽ち五三の信心と
教得し陸奥の洞まむせび淨身まゝるんを教ふ聖人淨信
給ひ即淨刹刀と出せりて法名と無る信と賜りてそれより
常陸陸田の淨身まゝり二心まゝりて其後聖人都へ歸り

終つ御法の本國に歸り弥陀の本願を弘めりて代りて衆生を
化養とせしと仰渡さばは受る信坊師命又背き難くはく
奥州(こそのら)に其御教一首詠りて
捨くま(すくま)故郷(こきやう)又も歸りて弥陀とたのものなり
かゝらんよまよ受る信坊是れ奥州宮城郡一寺と造營して
淨化身聖人たる今の仙臺の城に稱念寺に此齋跡又その
後同國會津郡又房(若松の近隣)といふ所に一寺造立し文永九年十月
廿三日七十九歳して大往生と遂らまぬこれと無る信寺に
義意三年固縁まより同國白川郡棚倉又移住し宝永年
中後州田中又寺とありて是れが善縁まより退隱し及んとい
又享保年中治東に再真せりて是れも是れも善縁にして相
續せ給ひて宝曆年中伊勢本願後如上人の為命又仍て宮府



